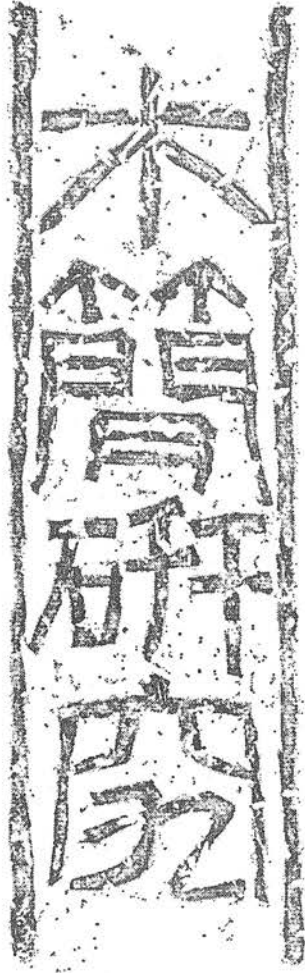


木簡研究

第八号

木簡研究

第八号



木  
簡  
学  
会

題字  
藤枝  
晃刻

# 目次

巻頭言——最後まで残る仕事……………青木和夫…………… i

一九八五年出土の木簡…………… 1

概要	東野治之	1		
凡例	4			
奈良・平城宮・京跡	橋本義則	7	京都・平安京右京八条二坊五町	吉村正親
奈良・平城京左京三条六坊七坪	東潮	13	京都・鳥羽離宮跡	磯部勝・鈴木久男
奈良・平城京右京七条一坊十五坪	中井公	15	京都・伏見城跡	原山充志
京都・長岡京跡(1)	清水みき	16	大阪・西ノ辻遺跡	西口陽一
京都・長岡京跡(2)	上村和直	21	大阪・観音寺遺跡	高橋雅子
京都・長岡京跡(3)	吉崎伸	22	大阪・犬飼堂廃寺	近藤利由
京都・平安京左京三条三坊十一町	寺島孝一	24	大阪・穂積遺跡	田上雅則
京都・平安京左京六条一坊八町	平尾政幸	25	兵庫・玉津田中遺跡	山本三郎
京都・平安京左京九条三坊十四町	小森俊寛	26	兵庫・辻井遺跡	山本博利・秋枝芳
京都・平安京右京八条二坊二町	辻裕司	27	兵庫・長尾沖田遺跡	大平茂
			兵庫・但馬国府推定地	吉識雅仁
			愛知・朝日西遺跡	佐藤公保

愛知・大洞遺跡	宮腰健司	山形・俵田遺跡	佐藤庄一
愛知・沓掛城跡	木村光一	秋田・秋田城跡	日野久
静岡・勝間田城跡	及川司	福井・九十九橋	清田善樹
静岡・神明原・元宮川遺跡	栗野克己	福井・一乗谷朝倉氏遺跡	佐藤圭
神奈川・今小路周辺遺跡	河野真知郎	石川・三木だいもん遺跡	小森秀三
神奈川・鶴岡八幡宮境内研修道場用地遺跡	齊木秀雄	富山・弓庄城跡	高慶孝
茨城・鹿島湖岸北部条里遺跡	田口崇	新潟・番場遺跡	坂井秀弥
滋賀・西河原森ノ内遺跡	徳網克己・山田謙吾	新潟・小島西遺跡	伊藤敦
滋賀・勸学院遺跡	仲川靖	島根・富田城跡	鳥谷芳雄
滋賀・金剛寺城跡	近藤滋	広島・草戸千軒町遺跡	下津間康夫
滋賀・柿堂遺跡	山本一博	広島・尾道遺跡	森重彰文
栃木・法界寺跡	前沢輝政	和歌山・秋月遺跡	片山和哉
宮城・今泉城跡	佐藤洋	福岡・大宰府跡	山本高照
宮城・富沢水田遺跡	渡部弘美	福岡・大宰府条坊跡	倉住靖彦
岩手・中尊寺伝三重池跡	荒木伸介	福岡・豊前国府跡	山本信夫
岩手・胆沢城跡	佐久間賢	福岡・如法寺遺跡	石松好雄
青森・浪岡城跡	木村浩一		重松敏美

一九七七年以前出土の木簡(八)

奈良・平城宮跡(第一四次)

鬼頭清明 105

奈良・平城宮跡(第二五次)

鬼頭清明 106

奈良・平城宮跡	
奈良・平城宮跡(第四〇次)	
奈良・平城宮跡(第四一次)	
加藤 優	108
鬼頭 清明	106
鬼頭 清明	107

奈良・平城宮跡(第四三次)	
奈良・唐招提寺講堂地下遺構	
和田 萃	116
鬼頭 清明	114

中国簡牘研究の新動向	
李 学勤	123

中国簡牘研究の新しい動向	
李 学勤	128
訳・菅谷 文則	

倉札・札家考	
原 秀三郎	135

柚井遺跡出土木簡の再検討	
栄原 永遠男	151

出土の文字資料からみた中世民衆生活の一面——草戸千軒町遺跡を中心に——	
志田原 重人	163

彙報

## 凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および積文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、積文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「井」「井」「季」「躰」等についてのみ使用した。

一、積文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、積文に加えた符号は次の通りである（六頁第1図参照）。

「」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。

< 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

々々

抹消した文字であるが字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。



抹消により判読困難なもの。

欠損文字のうち字数の確認できるもの。

欠損文字のうち字数が推定できるもの。

欠損文字のうち字数の数えられないもの。

前後に文字のつづくことが推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

異筆、追筆。

合点。

木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

校訂に関する注で、原則として釈文の右傍に付し、

本文に置き換えるべき文字を含む場合。

編者が加えた注で疑問の残るもの。

文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

同一木簡と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

\* 図版に写真の掲載されているもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し図名を（ ）内に示した。地図中の▼は木簡の出土地点を示す。

一、釈文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、

じぎの一五型式からなる（六頁第2図参照）。

011型式 短冊型。

012型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

034型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

052型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

053型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

062型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式 削屑。

広島・草戸千軒遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒

町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡一—』を参照されたい。なおその他の中世木簡については以上の型式番号に適合しないものが多いので、注記を省略したものもある。

任下財像人安万呂  
行夜使仍注状故移

×位下財掠人安万呂  
×行夜使仍注状故移

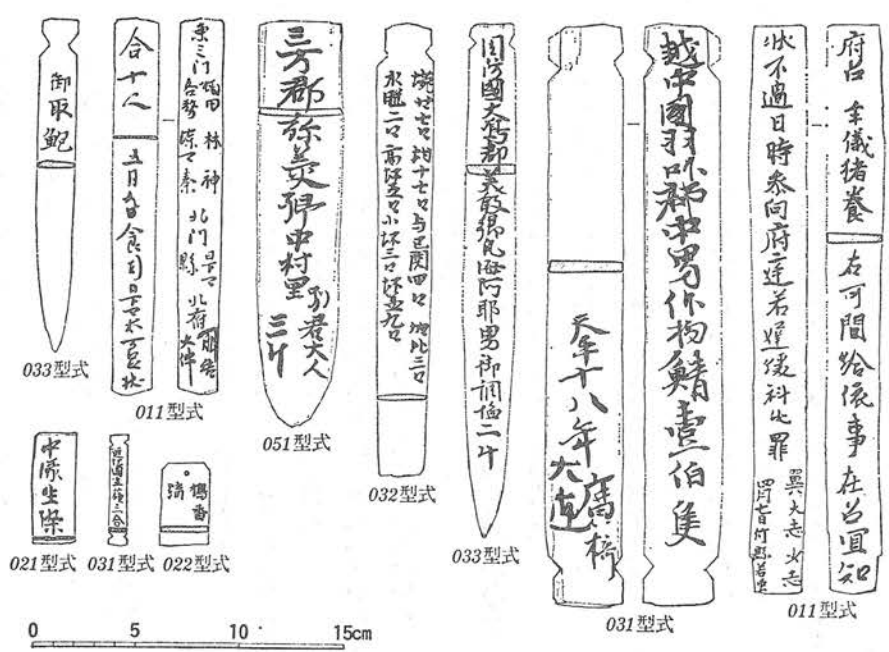
泉進上材十二条中 又八条  
桁一条

武蔵国男衾郡余戸里大贖鼓一斗天平十八年十一月

請飯 蔵部一人 舍人十七人  
史生一人 右依例所請如件

請飯 蔵部一人 舍人十七人  
史生一人 右依例所請如件

第1図 木簡積文の表記法



第2図 木簡の形態分類

木簡学会役員

						会長	岸俊男
						副会長	大庭脩
						委員	青木和夫
							門脇禎二
							佐藤宗諱
							坪井清足
							原秀三郎
			監事				関晃
			幹事				綾村宏
							館野和己
							橋本義則
							土田直鎮
							加藤優
							寺崎保広
							町田章
							直木孝次郎
							田中琢
							狩野久
							岩本次郎
							平野邦雄
							岡崎敬
							鬼頭清明
							田中稔
							早川庄八
							栄原永遠男
							東野治之
							和田萃



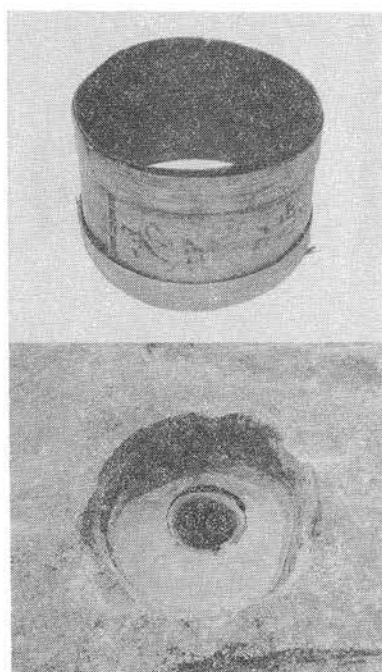
(奈良・桜井)

## 奈良・平城京右京七条一坊十五坪

- 1 所在地 奈良市六条町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)九月～一〇月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 中井 公・森下恵介
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

当該地は平城京右京七条一坊十五坪の西辺中央部にあたる。西一坊大路及び同東側溝を確認し、坪の内部では奈良時代の掘立柱建物

六棟と井戸一基に加えて、一一世紀後半から一二世紀初頭にかけての井戸三基を検出した。このうち後者の井戸の一基に墨書曲物が使用されていた。井戸の構造は、円形掘形(径一・二m、深さ〇・九五m)の底部に墨書曲物を据え、この上部に



墨書曲物(上)と井戸全景(下)

須恵器甕の口縁部をのせ、その上にいまひとつの曲物を置いている。枠内出土の土器からみて、一一世紀末に廃絶したと推察できる。

### 8 木簡の積文・内容

(1) 「湯屋□延久参年四月十日」

曲物は、厚さ六mmの薄板(檜材)を一巡させた本体(径四四・五cm、高さ三〇・五cm)の両端に箍をはめ込んだもので、底板がはずされている。墨書は、側板本体の外面中央部に施されている。

### 9 関係文献

奈良市教育委員会「平城京右京七条一坊十五坪の調査」(『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和六〇年度』一九八六年)

(中井 公)

## 木簡研究 第三号

巻頭言——中国簡牘呼称についての提言——

大庭 脩

一九八〇年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京(外京)五条五坊七坪 藤原宮

跡 稗田遺跡——下ッ道—— 長岡京跡 大藏司遺跡 西沖遺跡

御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 桜

町遺跡 白山橋遺跡 御館遺跡 御着城跡 鶴・城山遺跡 草戸

千軒町遺跡 野田地区遺跡 観世音寺僧房跡 大宰府学校院跡東

辺部

一九七七年以前出土の木簡(三)

平城宮跡(第二一次・第二二次北) 薬師寺 下岡田遺跡

中国における簡牘研究の位相 池田 温

庸米付札について 狩野 久

静岡県城山遺跡出土の具注曆木簡について 原 秀三郎

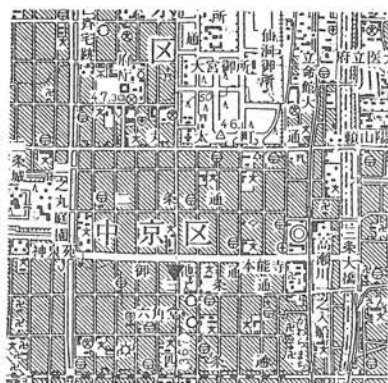
草戸千軒町遺跡出土の木簡——形態を中心に—— 志田原重人

彙報

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

## 京都・平安京左京三条三坊十一町

- 1 所在地 京都市中京区烏丸通姉小路上ル
- 2 調査期間 一九八〇年(昭55)一月～一九八一年一月
- 3 発掘機関 平安博物館
- 4 調査担当者 寺島孝一
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都東北部)

この地の北側に後鳥羽上皇の院の御所である「押小路殿」、南には

後白河法皇の院の御所の「三条西殿」が営まれ、十一町のこの地にも、讃岐守、佐渡守を歴任した高階為清が邸宅を構えていた可能性がある。平安時代の遺構としては調査地東端で「烏丸小路」の東側の側溝と考えられる

南北の溝、方形の木組のある井戸などを検出している。

他には、中世から近世に至る数多くの井戸や土壙を検出しているが、二つの土壙から二〇数個体の備前焼の大甕が出土した点が注目される。鎌倉時代後半から南北朝にかけてのものと考えられ、いずれも意識的に細かく破壊されて土壙に投棄されていた。

墨書のある下駄が出土したのは、共伴した土師皿などから一六世紀末から一七世紀前半と思われる木枠をもった井戸である。土師皿の他に出土した遺物としては、美濃系天目茶碗、唐津系草文皿、羽釜などで、木製品としては他に箸などが出土している。

### 8 木簡の积文・内容

- (1) 「一」

幅六・七cm、長さ約二〇cmの下駄の裏面に墨書されている。大きさをからみて、女性用かと考えられる。

### 9 関係文献

勅古代学協会『平安京跡研究調査報告第十二輯 押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』(一九八四年)

(寺島孝一)



(京都西南部)

## 京都・平安京右京八条二坊二町

- 1 所在地 京都市下京区西七条石井町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)八月～一〇月
- 3 発掘機関 財団法人埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 本 弥八郎・加納敬二・辻 裕司
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地点は二町の西端及び西靱負小路に該当し、西市の南東部に隣接する。周辺の地形は南西に向かい緩傾斜を呈し、調査地点は低位に属する。小学校敷地内の施設改築に伴い事前に発掘調査を実施した。当地点周辺はこれまでに発掘調査等が実施され、木簡の出土とともに木質遺物の遺存状態が比較的良好な地域として周知されている。調査の結果、西靱負小路及び四行

八門制による一町内の区画溝と考えられる南北・東西方向の溝等を検出した。さらに西靱負小路直下で南北方向の流路を検出した。また西靱負小路東側溝の東肩口に沿って南北方向の柱列を、区画溝の南肩口に沿って東西方向の柱・杭列及び板材を検出している。出土遺物から、区画溝は九世紀前半、流路は九世紀前半から後半、西靱負小路は九世紀前半から一〇世紀に属すると考えられる。遺物は各遺構から、木器・土器・輸入陶磁器・瓦・銭貨・金属製品・骨・種実等が出土した。出土量は豊富であり、内容は多岐にわたる。木簡・削屑は九七点出土した。木簡は区画溝から一五点、流路から一三点、西靱負小路西側溝から一点、また削屑は区画溝から六三点、流路から五点出土している。(1)～(4)は区画溝、(5)～(7)は流路からの出土である。

### 8 木簡の积文・内容

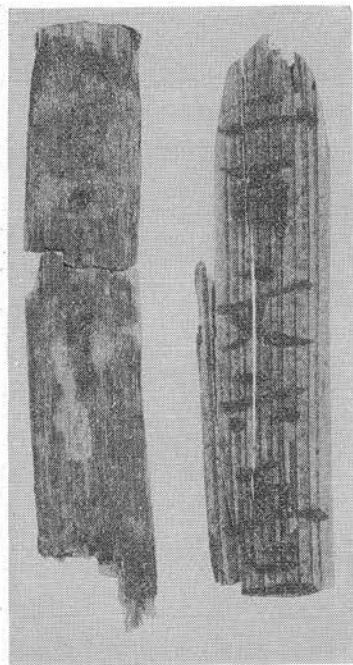
- (1)  葉供  其事甚重 〔進カ〕  
 皇  皇  皇  皇  皇  皇 〔天子カ〕  
(128) × 33 × 3 081 \*
- (2)  葉供進其事甚重  〔道カ〕  
 不寧受不従有道道道  道 〔道カ〕  
(256) × 43 × 5 019 \*





1985年出土の木簡

- (32) 川□□  
(75)×(18)×3 081
- (31) 葛一 [連カ]  
□□  
(48)×(14)×1 059
- (30) 買物□□  
笹□□□  
(93)×27×2 019
- (29) □斗\]  
(75)×19×2 039
- (28) □古万呂上米五斗五合  
(112)×19×3 051
- (27) × [廿カ]  
□三日物忌  
(92)×28×4 081 \*
- (26) [福カ]  
□官伍□□□□□  
(457)×42×4 059
- (25) 大同二年十二月廿 [日カ]  
□申 [時カ]  
×  
(214)×40×6 081
- (24) 廣  
091
- (23) □味  
091
- (22) 之□  
091



(25)

(7)

- (37) [請火申カ]  
□□□□□  
091
- (36) [乃心及カ]  
□□□□□  
091
- (35) [得カ]  
□思莫持 [繡カ]  
□之□  
091
- (34) 大大目□□□  
□  
(146)×20×4 081
- (33) □□ [不カ]  
□五□□□  
(118)×8×7 081
- (仕 裕 司)

## 京都・平安京右京八条二坊五町

- 1 所在地 京都市下京区梅小路西中町
- 2 調査期間 一九八二年(昭57)一〇月～二月
- 3 発掘機関 働京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 吉村正親
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部)

本調査は上水道配水管敷設に伴う立会調査である。調査位置は平安京復原条坊図では、八条坊門小路・梅小路・西鞆負小路などの部分にあたる。西鞆負小路想定線上で八条通から五〇m北へ上った地点で、木棺墓を検出した。木棺墓は地表下七〇～一二〇cmの深さにあり、南北方向に据えられていた。掘削時には半分程度しか検出できず、旧管撤去後に残り半分を取り出し

た。周囲の土壌は灰色の泥土であり、木製品の保存には最適であった。棺の下には三列の一〇～二〇cmの角材を並べ、小口部は板の上を薄い曲げ板でおおっていた。全体は上方からの土圧によって押しつぶされ、二枚の板が重なっていた。内部には板に付着した骨片があり、板には梵字及び仏名が書かれていた。

### 8 木簡の积文・内容

上半分は腐蝕が進行して判読できない所が多い。梵字1はウン、2は千手千眼観世音菩薩广大円満無礙大悲陀羅尼の一節か、3は勢



(1) 部分

至菩薩の種子か、4は十一面観音小呪、5はオン、6は阿弥陀如来の種子、7は八字文殊真言、8は観音菩薩の種子、10は大随求陀羅尼、11は滅罪真言である。この他に十一面根本真言の梵字を書いた断片がある。これらの内容からすると天台宗と関係があると思われる。下段の南无量光仏以下は十二光仏であり、欠失している二仏

(1) 「  
唵□□□□唵□縛底

(梵字1)

南无胎藏界

(梵字2)

□□□□□□□□□□

縛達磨(梵字3)

(梵字4)

南无金剛界

(梵字5)

(梵字6)

(梵字8)

三昧耶薩怛鑠

(梵字7)

光  
□明真言

(梵字9)

若聞法者無一不成仏

(梵字10)

我等  
□与衆生皆共成仏道

妙法蓮華経(梵字11)

は無対光仏と歡喜光仏である。

9 関係文献  
釈読にあたっては木下密運氏のご協力をえました。

概要』(一九八四年)  
東京都市埋蔵文化財研究所『昭和五七年度京都市埋蔵文化財調査

南无不動明王

南无尺迦牟尼仏

南无弥勒菩薩

南无文殊師利

南无虚空藏菩薩

南无地藏菩薩

南无大勢至菩薩

南无龍樹菩薩

南无无量光仏

南无大悲觀世音菩薩

南无清淨×光仏

南无×礙光仏

南无智恵光仏

南无×礙光仏

南无边光仏

南无×礙光仏

南无称光仏

南无×礙光仏

南无阿弥陀仏十遍

南无超

南无阿弥陀仏十遍

南无×礙光仏

南无×礙光仏

1712×530×14 061

(吉村正親)

## 京都・鳥羽離宮跡

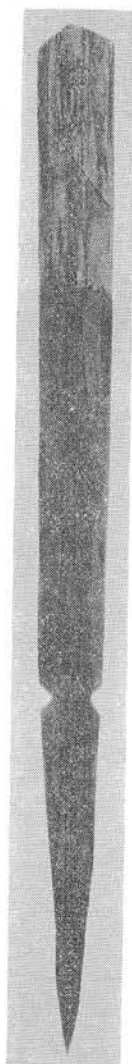
- 1 所在地 京都市伏見区竹田浄菩提院町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)三月
- 3 発掘機関 財京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 磯部 勝・鈴木久男
- 5 遺跡の種類 離宮跡
- 6 遺跡の年代 平安時代後期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都東南部)

鳥羽離宮跡の発掘調査は、一九六〇年から行われ、現在までに一九次の調査を実施している。今回の調査は下水道管敷設工事にと

もない実施した調査で、調査地は鳥羽離宮跡東殿に推定される地区で、現在の近衛天皇陵(安楽寿院南陵)の西側に位置する道路内である。木簡は、第四四・一一



(磯部 勝・鈴木久男)

二次調査で検出した突堤状遺構(近衛天皇陵を囲うようにめぐる)の土留め跡の一部と考えられる外側埋土から出土した。土留め跡は南北方向に検出され、工法は杭を打ち込み、竹を絡ませ行っている。打ち込まれていた杭は面取りがしてあり、竹は半截され横方向に用いている。検出したのは七段で高さ三〇cmを測る。共伴遺物には土師器皿、瓦器碗など平安時代後期の遺物が出土している。

### 8 木簡の積文・内容

#### (i) 「検非違所別当式尺□」

610×45×4 0.51 スギ

出土したのは一点だけで、形態は、長方形の板材の上端部を山形に削り、下端部は左右から削り尖らせる。文字は上端から三分の一まで書かれており、同じく三分の二の所に左右からの切込みがある。

### 9 関係文献

『京都市埋蔵文化財研究所』増補改編・鳥羽離宮跡(一九八四年)  
京都市文化観光局・財京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報』(一九八六年)



(京都東南部)

## 京都・伏見城跡

- 1 所在地 京都市伏見区桃山町金森出雲
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)一月～二月
- 3 発掘機関 京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 小森俊寛・上村憲章
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 桃山時代～江戸時代初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

伏見城は、文禄五年(一五九六)豊臣秀吉によって桃山丘陵に築城が始められ、元和九年(一六二三)に廃城となるまで三〇年弱の期間

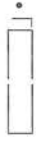
存続している。調査地は、御香宮の西側に隣接する敷地で、北は毛利橋通りに面している。桃山丘陵の中央から西に延びる支丘陵上に位置し、大名屋敷が構えられた地域にあたっている。又、当地は、縄文時代の金森出雲遺跡、奈良時代から

平安時代後期とされる御香宮廃寺跡等の遺跡が重複する地域である。一九八五年に当地が宅地造成されることとなり、その造成工事に先だって試掘調査を行い、近世初頭の門跡を始め、古代から中世の遺構・遺物等を検出した。これらの成果をもとに発掘調査を実施している。

伏見城の存続した桃山時代から江戸時代初頭の遺構は、厚い整地層の上面に造られており、門跡・石組井戸・溝・掘込み等を検出している。門跡は、礎石などの基礎的な部分及び石垣等が遺存している。これら門跡には炭・焼け瓦を含む焼土層が直接被って堆積しており、焼け落ちたものと見られる。焼土層出土の軒瓦には、瓦当面に金箔が残るものも認められる。この門跡は、大名屋敷の西門にあたるものである。木簡が出土した掘込みは、門跡の東方にあたる屋敷敷地内に掘られており、東西約一七m、深さ約二mを測る規模の大きな遺構である。ただ、南北方向については約六mを検出したにとどまり、全長は不明である。遺構内からは、下駄、箸、篋、折敷、曲物の木器や漆器碗とともに、瀬戸・美濃・信楽・備前などの茶陶を含む国産陶器類、刀、小柄などの金属製品等が出土している。また土師器等の土器類も比較的まとまって出土しており、桃山時代から江戸時代初頭に比定される遺物群である。

### 8 木簡の积文・内容

(1)



中將御覽 はく衛門

大きかゝ



141×27×7 011

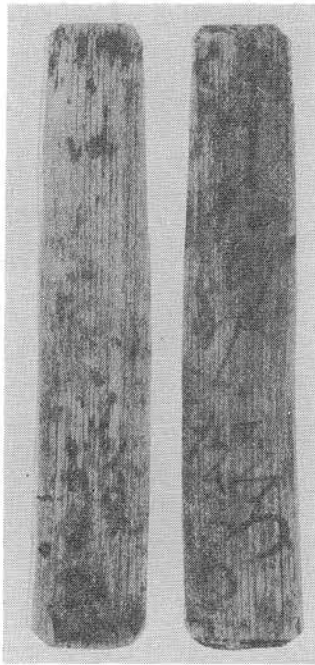
(2)



ます一つ垣〔石カ〕右衛門尉

327×30×4 051

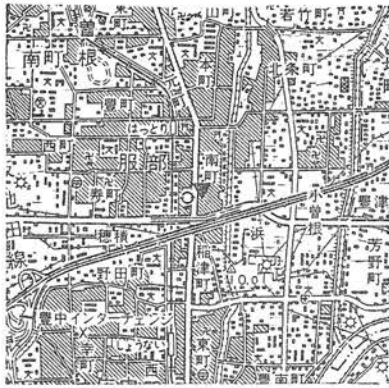
(1)には中將と見えるが、伏見城の存続した期間に中將の官職を授けられていた武將は、井伊直孝、織田信雄、佐竹義宣、島津家久の四人である。  
(原山充志)



(1)

## 大阪・穂積遺跡

- 1 所在地 大阪府豊中市服部南町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)七月～八月
- 3 発掘機関 豊中市教育委員会
- 4 調査担当者 田上雅則
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪西北部)

穂積遺跡は、猪名川、天竺川、神崎川などの大小河川によって形成された沖積平野に立地する、弥生時代後期から室町時代に亘る複合遺跡である。周辺には勝部遺跡、田能遺跡、庄内遺跡など学史的にも著名な遺跡が点在し、また、大阪府指定史跡の春日大社南郷目代今西氏屋敷に所蔵される『今西家文書』より、撰関家領垂水西牧榎坂郷に含まれる事が判明しており、考

古学と文献とを対比する上でも、非常に注目されるところである。

当遺跡は、昭和初年に地元の住民によって発見され、戦前には弥生時代後期の土器を、この遺跡名に因んで「穂積式」と称し、畿内の後期弥生土器を指すものとして広く使用されたことから、学界でも著名な遺跡となった。しかし発見以来本格的な調査もされず、遺跡の実体が不明のまま五〇年余りも経過した。

近年に至って、数回の調査が実施され、弥生時代から古墳時代前期の良好な一括出土土器群や、桜井谷編年Ⅱ-2の須恵器を伴う径一八mの削平された円墳、鎌倉時代の掘立柱住居跡、井戸、条里制の坪境と考えられる溝を検出している。

一九八五年、マンション建設に伴う調査において、鎌倉時代の曲物を転用した井戸、掘立柱住居跡、溝を検出した。溝は東西に走行し、幅二m、深さ五〇cmを測り、堆積埋土より流水路と考えられるものである。木筒はこの溝より出土し、一四世紀初頭に比定される瓦器碗、土師器皿が共伴した。

### 8 木筒の釈文・内容

(1) . □□□□ ぬ

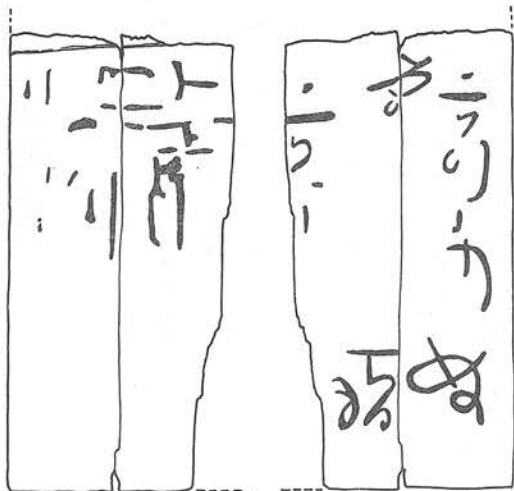


. □□□ □□□ □□□  
「 (横書)

(60) × (20) × 2 081

上部、側辺を欠損している。判読できる文字は「ぬ」だけであるが、左右の最初の字形が類似しているため、同じ文章が数行記されているものと推定される。尚、裏面にも墨の痕跡が認められるが、文字であるか否かは判断できない。

(田上雅則)





## 兵庫・辻井遺跡

- 1 所在地 兵庫県姫路市辻井字山之脇
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)四月～九月
- 3 発掘機関 姫路市教育委員会
- 4 調査担当者 山本博利・秋枝 芳
- 5 遺跡の種類 水田跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は白鳳時代創建の寺院跡として著名で、旧夢前川ゆめさかの形成した沖積平野に立地する。標高は約一九mである。姫路市教育委員会は



(龍野)

昭和五七年から市道安室、パイパス工事に伴い発掘調査を実施している。昭和五七年の調査で掘立柱建物跡、土壇、井戸、溝等が検出された。井戸内より多量の須恵器と共に木簡が三点出土した。今回の調査は前回調査地の東約一五〇mに位置

する。調査の結果、東端部より旧夢前川の跡と推定される河川跡が検出され、木製品等が多数出土した。

旧河川は西北から南東の名古山方向への流れを示しており、川幅六〇m以上、深さは約三mである。旧河川内堆積土は下から黒色シルト層(弥生時代中期後半)、灰色シルト下層(七世紀初頭)、灰色シルト上層(八世紀前半)、明るい灰色シルト層(九世紀後半～一〇世紀初頭)等である。特に、灰色シルト上・下層より馬形・人形・舟形・斎串等の木製祭祀遺物が多数出土した。

木簡はいずれも灰色シルト上層より木製模造品・須恵器・土師器と共に出土した。この土層より木簡以外に「大井」「井戸」「殿」「大家」「夫」「力」「个」等の墨書土器が二三点出土したことは注目されよう。特に「夫」「力」の墨書土器は昭和五七年検出の井戸内の墨書土師器と極めて類似した字体である。河川内堆積土は比較的早い段階に陸化し、その土壌面のいくつかに足跡、畦畔が検出されたことから、水田に利用したことが窺える。今後、木製模造品の祭祀の様相を解明することが必要となろう。

### 8 木簡の積文・内容

(1) 磨

□内□□

(31)×17×4 081

(2)

□一斗止□□

(128)×24×7 019



(172) × 23 × 7 081



(344) × 34 × 3 019

(2)と(3)は直接接続しないが、同一木簡の断片である可能性がある。  
(4)は習書であろうか。

(山本博利・秋枝 芳)

「大伴」「夫」の墨書土器多数出土

— 兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘報告書』

一九八五年に兵庫県文化財調査報告書第三十冊として出版された。同書によると、七点の「大伴」、二点の「夫」、その他「椋垣」「殿」などの墨書土器が出土している。「大伴」は平城宮、多賀城、姫路市辻井遺跡で見つかっているという。土器はいずれも奈良時代のもの。

本文編（本文二四八頁・図版七二図）図版編（一〇七図）。

申込先 神戸市中央区下山手通四丁目十六番三号

兵庫県文化協会 頒価 一一〇〇〇円

兵庫・<sup>なが</sup>おきた  
長尾沖田遺跡

- 1 所在地 兵庫県佐用郡佐用町佐用・長尾
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)五月～八月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 大平 茂・村上賢治
- 5 遺跡の種類 集落跡・寺院関連遺跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～古墳時代前期、奈良時代後半～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



遺跡の所在する佐用町は、播磨の西北端に位置し、歴史的・地理的に古来から交通の要衝

(美作路・因幡路)である。

遺跡は、千種川支流の佐用川右岸、標高約一一〇mの台地上に立地している。

また同台地西には、白鳳時代の創建と考えられる長尾廃寺の塔心礎が残存する。

(佐用)  
調査は、県土木道路改良

事業に伴う事前調査で、一九八三年に続く第二次全面調査である。

木簡と関連する遺構には、平安時代初頭の直線道路（現存長一七〇m、幅約三・五mでさらに北に延びるもよう）とそれに付設された溝（幅約一・五m、深さ約三〇cm）がある。道路上面は、礫及び一部瓦片（長尾廃寺のもの）を敷き、低湿地部では丸太材を横にならべ、その上を河原石と土砂で被って構築している。

木簡は、低湿地部の道路西側溝から、多数の木製品・木片と共に出土した。その他出土遺物は、「川辺」「中殿」と記す墨書土器二点、齋串四点、木製鋤模造品一点、馬歯などがある。

#### 8 木簡の积文・内容

(1) ・「奴□□□每里



(288) × (45) × 3 019

(2) □□□天マ×

(60) × (16) × 5 081

(1)・(2)ともわずかに墨痕が残るのみで、肉眼判読は不可能である。判読は、奈良国立文化財研究所鬼頭清明氏の御教示による。

#### 9 関係文献

兵庫県教育委員会『長尾沖田遺跡現地説明会資料』（一九八五年）  
同『ひょうごの遺跡 7号』（一九八五年）

（大平 茂）

## 愛知・朝日西遺跡

- 1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)五月～九月
- 3 発掘機関 愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 遠藤才文・佐藤公保・安藤義弘
- 5 遺跡の種類 城郭跡・都市跡
- 6 遺跡の年代 平安時代末期～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

朝日西遺跡は、五条川の形成した自然堤防の東岸に位置する。当遺跡の南西約1kmには清洲城本丸跡がある。対岸の清洲城下町遺跡と共に、当遺跡は中世末から近世初頭には清洲城下の一面を占め、外堀と中堀(旧五条川)に挟まれた町人地と寺社地が展開する。発掘調査は、一九八一年より名古屋環状二号線建設に伴う調査として継続して行われ、一九八五年度の調

査を以て終了した。

一九八五年度は本道部五カ所の調査が行われた。木簡及び墨書曲物が出土したのは、東端の調査区のSDO一とSDO三である。

SDO一は、一九八四年度の調査で慶長三・四年(一五九八・九)銘の卒塔婆と文禄二年(一五九三)銘の施釉陶器碗が出土したSDO一三に接続し、東方向へ走り、東端はSDO三の手前で終る。幅五・六m、深さ一・一・二mを測る。木簡の出土した地点はSDO一のSDO三よりの端で、溝最下層の粘質土中より出土した。

SDO三は南北方向へ走り、西側に幅二・五～二mの犬走りをも有する。犬走りを含めた幅は一七・五～二七m、深さは二・五mを測る。『清洲村古城図』(蓬左文庫蔵)によると、同溝は外堀の位置と一致しており、また同溝の東側には同時代の遺構がないことから、外堀と考えられる。木簡と墨書された曲物は最下層の粘質土より出土した。

これらの溝は堆積状況及び相伴遺物より、一六世紀末から一七世紀初頭にかけて共存しており、SDO一とSDO三(外堀)に画された地区は、木簡以外に「南無阿弥陀仏」と墨書された卒塔婆がSDO一より出土していること、町家に比べ区画面積が広いこと等から、城外を臨む寺社地と想定される。

8 木簡の积文・内容

SDO一

(1) 「かちや町」

『六』十六間三尺六寸

是より北

291×40×2 051

SQOIII

(2) ・□□小<sup>〔牧カ〕</sup>所

・□□□□□□□□小<sup>〔牧カ〕</sup>所

(318)×27×2 059

(3) 「白さたう

老斤

高さ98 複元径100 厚さ1.5 061

(1)(2)の木簡にある「かちや町」「小牧」町は、共に文禄二・三年(一五九三・四)に実施された「清須 町家改」(駒井日記)の日比野下野請取分の一二の町の中に見られる。このことから、「かちや町」「小牧」町を含めた一二の町は、本丸から北東方向にあたる朝日西遺跡周辺に位置していたと考えられる。(1)の「十六間三尺六寸」は「かちや町」の奥行きを示すものと推定され、町割の計画性がうかがえる。これらのことから、朝日西遺跡の西側を通過していた小牧街道沿いやその周辺には、「かちや町」「小牧」町等の一二の町が一定の区画を有し展開していたと考えられる。なお、(1)(2)の

木簡の性格については検討の余地があるが、清洲城下町の町割に関わる木簡として興味深いものである。(3)は一重巻きの曲物の側板外面に墨書されており、底板は欠く。

なお、木簡の積文に関しては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

9 関係文献

(財)愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六〇年度』(一九八六年)

(佐藤公保)





(豊田)

発掘調査は、史跡公園整

前後で、平城と考えられる。また、本城跡は、永禄三年(二五〇〇)の桶狭間の戦前夜に、今川義元が宿営したという伝承が残されていることでも著名である。桶狭間古戦場跡は、西南西四kmのところ位置する。

- 1 所在地 愛知県豊明市沓掛町字東本郷
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)二月～一九八四年二月
- 3 発掘機関 豊明市沓掛城址発掘調査団
- 4 調査担当者 伊藤秋男・松原隆治・木村光一
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 一五世紀末～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡は、名古屋市南東部から隣接する豊明市にかけて、北西から南東にのびる低丘陵の先端に立地する城跡である。標高は二二m

## 愛知・沓掛城跡

備の事前調査として、主に本丸跡を中心に行った。調査の結果、大きく三期に分かれる遺構群を検出した。木簡は、そのうちで最も下層の生活面から検出された污水だまりと考えられる池(SG〇一)から、すべて出土した。この池からは、ほかに多量の木製品(桶・鍋蓋

・箸・膳・漆器など、当時の日常什器と考えられるもの)・土器・陶磁器・食物残滓などが共伴している。

### 8 木簡の积文・内容

(1) 一〇〇〇〇〇

の

「と」

108×(105)×4

(2) 「〇」

50×(15)×2.5

(3) 「天文」

十七

「(穿孔) (花押)」

51×26×4.5

(4) 「天文」

十七

「(穿孔) (花押)」



(5) ・「天文

(穿孔)

十七」

・「(穿孔) (花押)」

本城跡出土の墨書の認められる木簡は、ほかに二八点、計三三三点にのぼる。ほかの二八点は、昨年の本誌上において、その概要は発表済であり、今回の五点は、遺物再整理の段階で新たに発見されたものと、諸般の事情で、前回発表できなかったものである。

(1)については、文字として認められる部分もあるが、文字の方向も一定せず、一貫した意味をなさない。落書の類と考えられる。(2)についても、墨痕はあるが文字ではないとも考えられる。(3)~(5)は、前回発表した(7)・(8)〔『木簡研究』七号〕と同様の形態・墨書をもつもので天文一七年(一五四八)を表わすと考えられる。

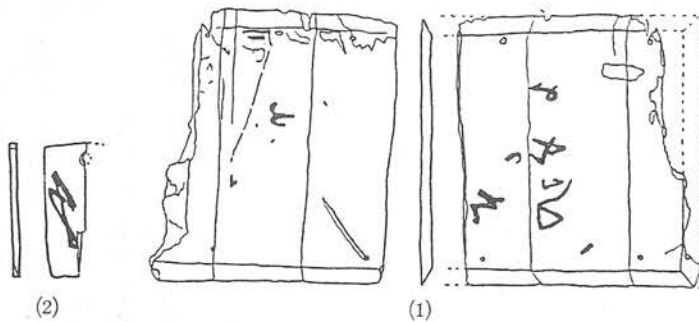
なお、(4)・(5)の木簡の法量が未記入であるのは、実測前に、保存処理に出してしまった当方の不手際の結果であり、もし機会があれば、後日何らかの形で発表したい。

また、昨年の本誌上では触れなかったが、木簡の积文・解読については、愛知教育大学教授新行紀一氏に、そのための赤外線テレビ撮影については、浜松市立博物館の向坂鋼二・漆畑敏の両氏に、様々な点でお世話になった。ここに、あらためて感謝の意を記させていただきます。

## 9 関係文献

伊藤秋男・木村光一「愛知沓掛城跡」〔『木簡研究』七号 一九八五年〕  
豊明市教育委員会『沓掛城址』(一九八六年・印刷中)

(木村光一)



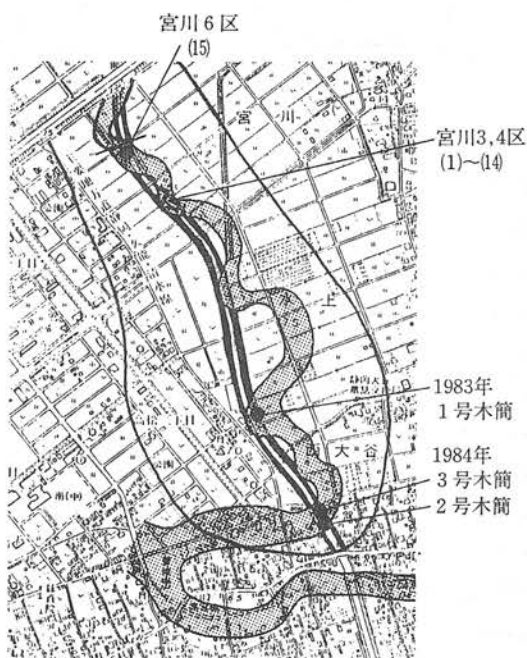


(静岡)

部川属状地の末端と、東側の有度山丘陵とに挟まれた低湿地を流れる大谷川の兩岸にひろがる南北約1km、東西約500mと静岡市内最大の遺跡である。本調査は大谷川放水路建設工事に伴ない、大谷川の川幅の拡張のため兩岸を幅

- 1 所在地 静岡市大谷(高松・水上・西大谷・宮川)
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)四月～一九八六年三月
- 3 発掘機関 静岡岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4 調査担当者 栗野克己・成島 仁・小島日出一・森下春美・足立順司・矢田 勝・鈴木基之・寺田甲子郎
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡・集落跡・河川跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 本遺跡は、静岡平野の南東部を流れる大谷川流域に所在する。安

静岡・神明原・元宮川遺跡



遺跡の範囲と旧大谷川河道推定図

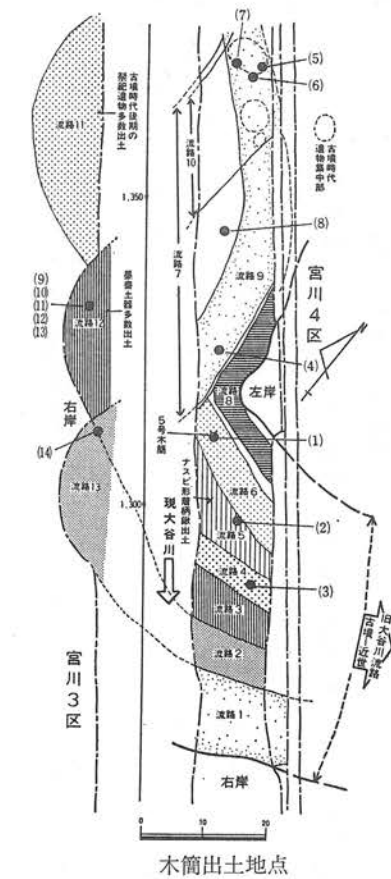
約二〇m広げるためのものである。遺跡の中央部を南北1kmにわたり貫通するため、昭和五五年度から発掘調査を開始、昭和六〇年度は遺跡のほぼ北半部を調査した。調査の結果、旧大谷川の河道が検出され、その埋積土内から、古墳時代後期・奈良～平安時代・中世にかけてのおびただしい量の祭祀遺物が出土、古代～中世における大規模な「水辺のまつり」がおこなわれていたことがうかがわれる。また、旧大谷川の兩岸にひろがる微高地上には、弥生時代、奈良・平安時代、中・近世にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸・溝

・土壙・柵列・粘土採掘跡などの遺構が検出された。

昭和五八・五九年度に四点の木簡が発見されており、すでに報告した。昭和六〇年度は、一五点の木簡が旧大谷川河道の堆積土層内から出土した。旧大谷川河道は、ほぼ古墳時代後期から形成されたもので、現代まで継続しているが、蛇行・侵食による変遷がみられ、①古墳時代後期、②奈良・平安時代、③平安時代末～中世、④近世～近代、⑤現在の流路に大別できる。新しい時期の流路が古い時期の流路を侵食破壊し、古い時期の遺物を混入している部分が多いが、年代幅を特定できる流路が良好に残存している部分もある。

一 宮川3・4区 旧大谷川河道

蛇行する旧大谷川が、右岸側を攻撃し屈曲する部分にあたり、一



木簡出土地点

- |      |             |
|------|-------------|
| 流路1  | 近世～現代       |
| 流路2  | 鎌倉～室町時代     |
| 流路3  | 平安末～鎌倉時代    |
| 流路4  | 平安時代        |
| 流路5  | 古墳時代終末～奈良時代 |
| 流路6  | 古墳時代時代後期    |
| 流路7  | 平安時代末～中世    |
| 流路8  | 古墳時代後期      |
| 流路9  | 近世～現代       |
| 流路10 | 古墳時代後期      |
| 流路11 | 古墳時代後期      |
| 流路12 | 平安末～鎌倉時代    |
| 流路13 | 中世          |

宮川3・4区の旧大谷川流路の年代観

三本の流路を検出した。流路の年代観は、ほぼ七期に区分できる。木簡は、これらの流路から一四点が出土した。(1)は流路6の最下層から出土したもので、古墳時代後期の須恵器・土師器など約二百数十点や、斎串、人形木製品、馬形木製品、馬形土製品などの祭祀遺物のほか、杵、編錘、横櫛などの木製品や、耳環、石製紡錘車、砥石なども出土している。須恵器の坏をA群～E群の五群に分類した。これらは静岡県の須恵器の編年観から、ほぼ六世紀中葉から七世紀中葉に比定されている。坏蓋、甕、長頸壺、高坏、平瓶も同時期に比定できるが、甕のうち一点はやや古い様相のものが存在する。そこで(1)木簡の年代観については、伴出須恵器群のうち最も新しいE群の時期が参考となる。さらに、木簡の性格から七世紀第三四半

期となる可能性が強い。類例として、浜松市伊場遺跡一号、二号木簡に伴出した須恵器があり、この流路6とほぼ同じ年代観のものであるという。

(2)木簡は奈良時代(七世紀末から八世紀前半)と考えられる流路5から出土。ナスビ形着柄鍬の完形品、玉類、墨書土器「多麻呂」、人形、馬形、斎串、堅櫛なども共伴した。(3)木簡は平安時代(一〇世紀後半)と考えられる流路4から出土。緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器「中万」「水」などが共伴した。

平安時代末から中世の流路7からは、(4)~(8)が散在して出土した。緑釉陶器、灰釉陶器、横櫛、斎串などのほか、万年通宝・長年大宝なども出土した。

平安時代末から鎌倉時代の流路12からは、(9)~(13)の五点が墨書土器四二点や、緑釉陶器、横櫛、ミニチュアの堅杵・供膳、糸巻、斎串、青磁、白磁などとともに出土、一括祭祀遺物と考えられる。

中世の流路13から、(14)と墨書土器四点が出土した。

二 宮川6区 旧大谷川河道

ここでは、宮川3・4区のような整然とした流路は検出されていない。平安時代末から鎌倉時代の包含層より、(15)の文字の書かれた絵馬が出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 宮川3・4区

旧大谷川 流路6

(1) 「相星五十戸」

・□□□□

135×22×3.5 011 五号

旧大谷川 流路5

(2) □□□□

(222)×15×8.5 039 十一号

旧大谷川 流路4

(3) □□□□

88×9×4 032 四号

旧大谷川 流路7

(4) 「南□□□□□」

201×20×2.5 051 六号

(5) □□

(178)×12×6 059 七号

(6) □□永二年

091 八号

(7) □□□□

(148)×29×5 081 九号

(8) □□□□

255×22×2 051 十号

旧大谷川 流路12

(9) 仁王□□□□

(120)×23×4 081 十一号

(10) 「南天」□□□□ (184)×18× 061 十三号

(11) 「南」□□<sup>〔妙カ〕</sup>× (79)×19×5.5 061 十四号

(12) 「南」× (339)×27×12 061 十五号

(13) 「南」□大日× (133)×32×5 061 十六号

旧大谷川 流路13

(14) 「南無大日」□□□ 227×22×3.5 061 十七号

(1)の「相星」は、『和名類聚抄』駿河国有度郡の項に記載されている郷名のうち「會星」(アフホシ)に該当するものと考えられる。五十戸の五の字は一部不明瞭である。戸の字は右に一画余分な点がある。裏の二文字のうち、一文字目の偏を馬と解することができる。旁は不鮮明であるが、上に口のような墨痕がうかがえる、驛の可能性もあるが定かではない。二文字目は、長と読むのか表と読むのか判然としない。

(10)~(13)は、頭部が五輪形に刻まれており、(9)とともに文字部分が生きていますので、卒塔婆として雨ざらしのうえ折損したと考えられるものである。(4)(5)(8)(14)は頭部を圭頭にととのえ、最上部に梵字が一文字書かれているものもある(4)(14)。これらの木簡の中には「南」の字から始まるものが多い。

年号の書かれた木簡(6)は、削屑であるうえ、上下とも切断されている。同一土層からの伴出遺物に、一三世紀頃の瓷器系小皿がある。

二宮川6区

旧大谷川 流路6

(15) (人物・馬の絵)

「このへ見てハ」  
「ハ」

・「このへ見てハ」

「引カ」ハ人能心を  
「个カ」カて

「穿孔」

(穿孔)

107×(45.5)×4 061 十八号

絵馬であり、一面に馬を引く人物が描かれている。馬の尾の右側にひらがなが三文字書かれているが、三文字目は板が切断されているため欠損している。裏面には長軸方向に三行の文字がみられる。一行目に「このへ見てハ」とあることから、表の絵と関連が深い願文が記されていると考えられるが、文意は判然としない。

### 8 関係文獻

静岡県埋蔵文化財調査研究所『静岡県神明原・元宮川遺跡木簡概要』(一九八五年)

同『静岡県神明原・元宮川遺跡 大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報』(一九八六年) (栗野克己)



(横須賀)

今小路周辺遺跡とは、中世都市鎌倉の中央路若宮大路の西に平行する今小路(今大路)の周辺一帯を指すが、調査地は同路の西側にある御成小学校の校庭部分である。調査地は標高八〜九mで、西側に山を負い、東方に緩傾斜する山裾低地に存在する。遺構面の標高は、中世で六〜七m、古代では五m前後で

## 神奈川・今小路周辺遺跡(御成小学校内)

- 1 所在地 神奈川県鎌倉市御成町
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)五月〜二月、一九八五年二月〜三月、六月〜一月
- 3 発掘機関 今小路周辺遺跡発掘調査団
- 4 調査担当者 吉田章一郎・河野真知郎
- 5 遺跡の種類 官衙跡・中世都市市街地跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代〜鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

ある。調査地の南五〇〇mの所に旧東海道が走っていたと考えられる古砂丘帯があり、北三〇〇mの所には古代寺院跡の存在を想わせる古瓦散布地がある。

木簡が出土したのは古代官衙跡の柱穴覆土からと、中世井戸の覆土からである。古代官衙跡は二時期にわたる建物跡で、第一期は東に開くコの字形配置の掘立柱建物群(西に正殿、南北に脇殿、東に柵)から成り、第二期は北側に四面廂の大型掘立柱建物、西に総柱建物二棟と長い建物、南に総柱建物(あるいは門か)と長い建物二棟を配す特異な配置から成る。

(1)木簡は、第一期の正殿と南脇殿とを結ぶような南西角地に並ぶ一本柱列のうちの一柱穴より出土した。柱穴は柱が抜取られたらしい埋没状況で、木簡は柱根削片と共に旧柱穴内に廃棄されたものと考えられる。(2)木簡は、官衙建物群より北方にはずれる場所の所属不明の柱穴より出土した。この柱穴も柱は抜取られたようで、木簡は木の葉の小残片を含む埋土中であつた。

中世の木簡(3)(4)は、中世武家屋敷の南西方にある庶民居住区(仮称)の井戸より出土した。この井戸は縦板方形横棧型の井戸枠をもち、掘り込み面からすると一四世紀初頭〜前半のものと考えられるが、出土遺物が少く、時期決定が難しい。

### 8 木簡の积文・内容



## 神奈川・鶴岡八幡宮境内

### 研修道場用地遺跡

- 1 所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)八月～一九八二年九月
- 3 発掘機関 鶴岡八幡宮境内発掘調査団(団長・大三輪龍彦)
- 4 発掘担当者 齊木秀雄
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀末～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(横須賀)

鶴岡八幡宮は康平六年(一〇六三)、源頼義が鎌倉由比郷に、前九年の役の戦勝を記念し勸請した石清水八幡宮が前身であり、治承四年(一一八四)鎌倉に入った源頼朝が現在地、小林郷北山に遷した。

もとは神仏習合により、鶴岡八幡宮寺と称し別当職等も置かれていたが、明治



元年（一八六八）の神仏分離令を受け境内の大塔以下の諸堂と共に仏職も廃止された。

調査地点は鶴岡八幡宮境内の東側境界線（土塁）内側、馬場道北一帯に位置し、豊臣秀吉の指示により天正一九年（一五九二）に作成された謂ゆる「造営目論見絵図」では「やなぎ原」と記されている辺である。

調査では一二世紀末～一五世紀にかけて四期にわたり構築された版築地業面が確認され、それらの版築面から掘立柱建物、半地下式建物（方形竪穴建築跡）、井戸、溝、土壇、土塁等が検出され、多量の中国産陶磁器、瀬戸窯製品、常滑窯製品、かわらけ、仏殿あるいは仏像に伴う荘嚴具を含む漆製品、人形、僧形八幡神坐像、将棋の駒等を含む木製品が出土している。木簡、墨書陶磁器、木片等が出土したのは検出された土塁に伴う内側（境内側）の溝のうち第Ⅱ期の溝、第Ⅲ期の溝である。それぞれの溝の年代は第Ⅱ期が一四世紀中葉～一五世紀中葉、第Ⅲ期が一三世紀中葉～一四世紀初頭と考えられる。墨書陶磁器類で判読できるものは「仏」「上」、漆器皿は「万」である。

8 木簡の积文・内容

(1) 「ヤマクチヨリ

タヒウ□タテノ

(166)×(42)×1 081

(2)  (穿孔) (穿孔)  
[今カ]

154×(43)×1 081

(3) 「上下内外内宮」

□□  
□□  
□□  
□□

192×(8)×1 081

この他に「梵字（キリク）南無阿弥陀仏」と書かれた板碑伝（最大288×88×3）四点、墨書木片一六点、札状木製品一〇点が出土している。

9 関係文献

鎌倉市鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査団『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』（一九八三年）  
(斉木秀雄)



(1)



(2)

# 茨城・鹿島湖岸北部条里遺跡

(豊郷条里沼尾地区)

- 1 所在地 茨城県鹿島郡鹿島町大字沼尾字沼尾
- 2 調査期間 一九八四年(昭59) 四月～九月
- 3 発掘機関 鹿島町教育委員会
- 4 調査担当者 田口 崇
- 5 遺跡の種類 条里遺跡(水田跡・旧河川)
- 6 遺跡の年代 縄文時代早期～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(鉦田・潮来)

鹿島湖岸北部条里遺跡は茨城県の南東部、北浦の東岸に位置しており、北浦湖岸の北部条里は宮中条里(爪木地区)と豊郷条里(須賀・沼尾地区)からなっている。須賀地区は古墳時代後期の水路や網代、杭列、水田跡、奈良時代の水路(溝)や田舟等の木製品が多く検出されている。沼尾地区はI区(北側)、II区(南側)に分けられて、I区では現水田下約1m程の所で中里川

の旧河川流路と思われる遺構が検出され、多くの木製品や土器、骨、土製品、石製品、鉄製品等が出土している。また、II区では規模が約5m×8mの短冊形の水田(時期不詳)が検出されている。

I区で検出された墨書のある木製品は旧流路の溜まりの部分で四点出土したもので、建築材の一部と思われる組み木、下駄、篋、櫛等日常生活用具と考えられるものや、木筒状の薄い板状製品(三宝荒神か)を伴出した。遺物は新旧混在しているが、中世以降のものが多くみられる。

## 8 木筒の積文・内容

松の木等の先端を杭の様に尖らせ、削り取った一面に供養経を書いたもの(当地で俗にいうザカマタ=難産で死んだ犬の供養をした塔婆)である。墨の残りが悪く文字が明確ではないが、河川が洗い流してきたものか、あるいは人が流したものが沈澱したものであろう。

(田口 崇)



(近江八幡)

湖岸より内陸へ約3kmほど入った標高八七m前後の緩傾斜地の微丘陵に位置する。遺跡は、弥生時代前期より室町時代に至る複合遺跡で、遺跡北部の木簡出土地点では、平安時代前期、奈良時代、白鳳時代末の大別して三時期の遺構が検出で

## 滋賀・西河原森ノ内遺跡

にしがわらもりうち

- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字西河原
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)四月～二月
- 3 発掘機関 中主町教育委員会
- 4 調査担当者 徳網克己・山田謙吾
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代前期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

源を発する野洲川と日野川に挟まれた沖積低地に立地する遺跡で、西河原森ノ内遺跡は、琵琶湖東岸の湖南平野北部の、鈴鹿山系に

きた。

調査は、中主町の土地区画整理事業にともない一九八四年より着手し、現在までに総面積一四、二〇〇㎡を調査している。遺跡の範囲は、調査地が道路用地のため明確にできないが、南北五〇m、東西三〇〇m余りと考えられ、今回検出された白鳳時代末から奈良時代前期の掘立柱建物群の範囲は、南北六三m以上、東西四八m以上の広がりをもつと思われる。これらの建物跡は、その配置や構造・出土遺物などから在地の有力者の居宅と考えられる。

木簡は、四点発見されている。(1)の出土したSD二二〇一は、幅約四m、深さ約〇・七mを測り、遺跡の東端を限る溝と思われる。木簡の共伴遺物は、八世紀前半の土器の他、刀子、鎌、柳箱、竪杵、杓子、盤、鉢、曲物と墨痕のない付札、祭祀具の斎串、舟形、棒状木製品等がある。(2)の出土したSD二二〇五は、幅二m、深さ〇・六mで、この溝が廃絶された後にSB二二〇二が建てられたと考えられる。木簡の共伴遺物は、七世紀後半の土器、フイゴの羽口と木製品(小机、下駄、曲物)がある。(3)は、幅約二m、深さ約〇・五mのSD二二〇八より出土した。(4)は、SD二二〇一の西側、下層遺構上面の包含層より出土した。その他、包含層からの出土遺物には、八世紀代の土器と共に石帯(丸柄)、円面硯、桃の果核と木製品(琴柱、矛、櫂、馬鞍、下駄)がある。墨書土器には「大」「神」「神主家」「凡記」「児」等の文字を書いた土器が包含層とSD二二〇一よ



(1)は短冊形の四隅を切り落とした形状を呈し、表裏に野洲郡内と考えられる戸主名を連記している。「石辺君玉足」は、平城宮南面東門（壬生門）近くの二条大路北側溝SD二二五〇より出土した木簡「益珠郡馬道郷石辺玉足」（『平城宮発掘調査出土木簡概報（十四）』『木簡研究』第三号）と同一人物と思われる。また「馬道□□□□」については、「馬道」の地名を氏名としている者がいるなど『和名抄』にない馬道郷の存在が明確になったといえる。年代は、平城宮出土の木簡に「郷」とあることから七一五年の郷里制施行以後で、溝の相伴遺物より八世紀前半のものと考えられる。

(2)は、薄く、表面を丁寧に調整し、表裏に墨書している。内容は、我が「卜部」に宛てた指示文書の形式になっており、漢文の中に一部和文を混えた和文体で書かれている。我は、自分の稲は馬が手に入らなかったので、「卜部」に舟人を率いて稲を取りに行くように指示している。行き先の「衣知評平留五十戸」は、現在の彦根市南西部に位置し、中主町の森ノ内遺跡より北東へ直線距離にして約二〇kmのところにある。「且波博士」は、ここに居住する五十戸長と考えられる。

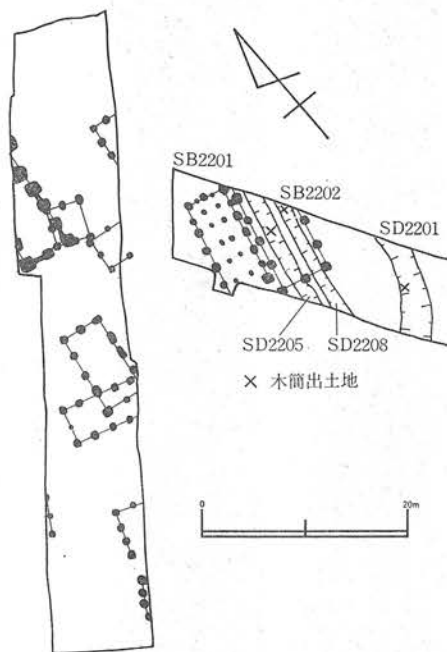
(3)は、上端が欠損しており、下端を尖らせている。表裏に墨書しているが、裏面には署名と思われるものがある。表面には、物品名と数量が書かれており、中段の「小」「児」は男子の年齢による区分であるが、ここでは「女」も含めて数量が示されている。年代は、

層位から判断して(2)と同時期のものとして推定できる。

(4)は、上部が両側からの切れ込みをもち先をとがらせたもので、下端を欠いている。本来は、大型の木簡であったであろうが、加工転用したものである。積文どおりの条里呼称とすると、本調査地内の推定条里と一致する。

尚、木簡の積文・解読には、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室の方々に御教示を得た。記して謝意を表します。

(徳納克己・山田謙吾)



木簡出土地点図

滋賀・<sup>かんがくいん</sup>勸学院遺跡

1 所在地 滋賀県近江八幡市馬淵町

2 調査期間 一九八五年(昭60)一〇月～一二月

3 発掘機関 勸滋賀県文化財保護協会

4 調査担当者 仲川 靖

5 遺跡の種類 集落跡及び官衙跡

6 遺跡の年代 弥生時代後期、奈良時代中期、平安時代後期～鎌

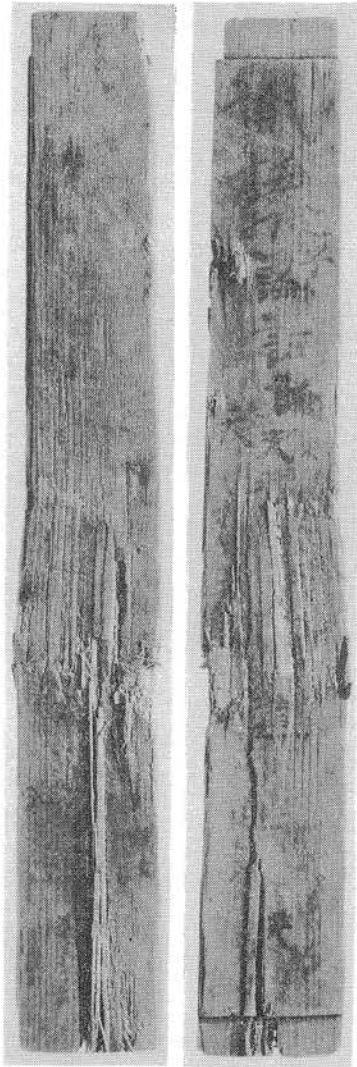
倉時代初頭

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

勸学院遺跡は、近江八幡市の西南部に位置し、日野川東岸の標高



(近江八幡)



約九七mの水田地帯にある。一九八五年に県営は場整備事業が計画され、事前発掘調査を実施した。この付近は以前より、「西殿」「大」と記された奈良時代の墨書土器が出土しており、蒲生郡衙の推定地とされていた。調査の結果、奈良時代中期の二間×三間の総柱の掘立柱建物二棟、井戸一基、溝一条を検出した。木簡は、そのうちの井戸より出土した。井戸は四隅横棧止め縦板井戸と称されるもので、鎮めの祭をして埋戻しており、齋串・柳箱・桃の種子・瓜・網籠・土器片が出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 之子 左右 我 □□□  
 論語□論□論天』天 道 『天』  
 (語) 天 我我我我 □道天 □

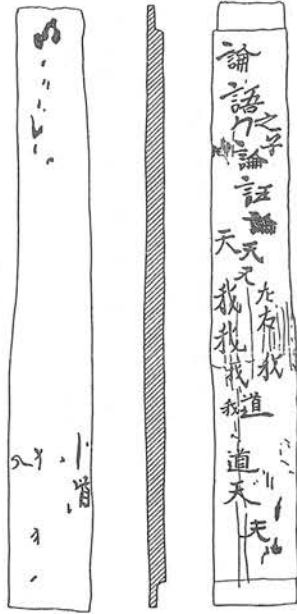


『入』

331×48×10 065

習書木簡で、二人の人物が書き記したとみられる。『論語』という書籍名と漢籍の一文にあるかと思える文字を手習いしたとみられる。『論語』は、養老学令5経周易尚書条によると、奈良時代では大学寮での必修書で、官吏登用試験にも用いられており、この習書木簡も、『論語』という文字を手習いしていた下級役人の姿をほうふつさせる。又、蒲生郡衙の存在を示唆する資料とも言えよう。

(仲川 靖)



## 木簡研究 第四号

卷頭言——木簡保存法の思い出——

坪井清足

一九八一年出土の木簡

概要 平城宮跡 奈良女子大学構内遺跡 法隆寺 藤原宮跡 長岡京跡 三条西殿跡 鳥羽離宮跡 若江遺跡 佐堂遺跡 大阪城三の丸(大手口)遺跡 小曾根遺跡 尾張国府跡 下津城跡 坂尻遺跡 小川城跡 恒川遺跡 三ツ寺Ⅱ遺跡 下野国府跡 多賀城跡 郡山遺跡 胆沢城跡 道伝遺跡 笹原遺跡 明成寺遺跡 安田遺跡 大森鐘島遺跡 高堂遺跡 漆町遺跡(C地区) 南吉田葛山遺跡 百間川遺跡群(原尾島遺跡) 草戸千軒町遺跡 道照遺跡 長門国分寺跡 野田地区遺跡 湯川神社境内遺跡 大宰府跡(大楠地区) 九州大学(筑紫地区) 構内遺跡 長野遺跡 辻田西遺跡

一九七七年以前出土の木簡(四)

平城宮跡(第二二次南・第二七次・第二八次・第二九次)

呪符木簡の系譜

和田 萃

木簡と上代文学——水産物付札をめぐる——

小谷 博泰

「漆紙文書」出土概要

佐藤 宗諱

彙報

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円





## 栃木・法界寺跡

1 所在地 栃木県足利市榊崎町

2 調査期間 一九八四年(昭59)五月～六月、一九八五年一月～

二月、一九八六年四月

3 発掘機関 足利市遺跡調査団(足利市教育委員会)

4 調査担当者 前沢輝政・田村允彦・中山俊彦・山崎博章・大沢

伸啓・久保賢史

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 鎌倉時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(桐生及足利・栃木)

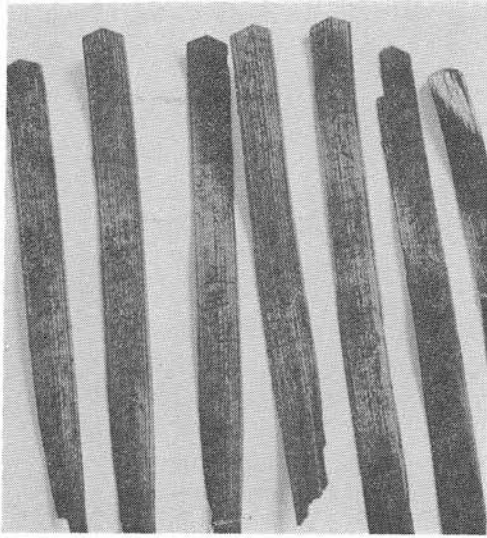
法界寺跡は、足利市街地より北東約四・五kmの山間地にあり、昭和五九年(一九八四)以来、足利市遺跡調査団が一次～三次の発掘調査(史跡整備のための確認調査)を行った。その結果、西側山腹に東面する堂塔跡(一次)、その前面(東側)の

低地には園池跡(二次)が確認され、その北部からは蔵骨器二個が並列状に出土、それに近接して建物跡を確認した。西方願生思想を表現した、鎌倉時代初期の浄土庭園形式の寺院跡と推定される。園池跡(鶴池跡)の西部には立石を伴う小島跡があり、西側池汀の底から柿経が二つの塊状となり、相接するように出土した。

### 8 木簡の積文・内容

柿経は本来一束のものが、池中にあったため自然に籜がはずれ二塊になったものとみられ、個々が頭を揃えた状態にあった。個々は笹の葉のごとく薄い柾目の材で、細長い短冊形を呈し、頭を山形、末端を平らに整え、多く下方に余白を残し、片面に経典を書写している。おおむね原形に近いものが多いが、すでに小破片となったものもあり、その総数は二〇〇〇枚に近い。一枚の原形は長さ約二五cm前後、幅一・二cmないし〇・七cmほどのもので、墨書は一行一七字位が多い。書体は楷書に近い字体で書かれており、判読可能なものもあるが、すでに墨が薄れ、あるいは全体に黒変が進行しており、読めないものもある。四枚の積文を左に示そう。

- (1) 「弥勒白仏言世尊是人功德甚多無量無□  
(235)×12×2 039
- (2) 「妙法蓮華経随喜功德品第十八」  
250×12×2 051
- (3) 「妙法蓮華経卷第八」  
(103)×9×2 059



(前沢輝政)

(4) 「南無阿弥陀仏

(176)×8×2 059

(1)は『妙法蓮華経』卷第六の「随喜功德品」第十八中の经文であり、末尾の□は「辺」である。本柿経は「妙法蓮華経」であることが知られる。なお、前記の经文の解説には、網干善教氏(関西大学教授)の御教示をいただいた。

9 関係文献

前沢輝政「足利・法界寺址の調査」(『日本歴史』四六一号 一九八六年)



(北 上)

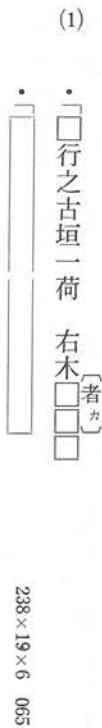
胆沢城跡は、築地および内外の溝により方約六七五mに外郭が画され、南北中軸線上の南から三分の一に、柱列によって方約八九mに区画される政庁域が位置している。政庁域の発掘調査は、これまでに、正殿、南辺区画東半および東辺区画で実施され、三期変遷の区画施設と六期変遷の正殿が判明している。第四九次調査は、この政庁北辺区画施設中央部の構造を解明す

## 岩手・胆沢城跡

- 1 所在地 岩手県水沢市佐倉川
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)五月～九月
- 3 発掘機関 水沢市教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一
- 5 遺跡の種類 古代城柵跡
- 6 遺跡の年代 九世紀初頭～一〇世紀前半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

る目的で実施した。調査の結果、北辺区画の柱列とほぼ棟通りを一致させる梁行二間の六期に変遷する東西棟が検出された。第一期の建物は桁行一三間で南中央が開口する。第三期以降は東西の非対称建物によって構成され、西棟には南廂が付く。また、第五・六期には、東西棟間に櫓門的施設が付加される。また、北辺区画柱列の外側には幅二・一～三・五m、深さ〇・五～〇・九mの溝が位置する。木簡は、上記建物北側の溝から出土した。この地区の溝では二度の改修がみられ、土留め杭により南岸を補修した二期目の溝底から木簡が発見され、相伴遺物および層位関係から、九世紀中葉前後に投棄されたと解される。なお、政庁域北東には、官衙地区(北方官衙)の存在が確認されており、その南を限ると解される東西方向の柱列および溝跡が政庁区画北辺と約一三mの間隔を置いて位置している。

### 8 木簡の積文・内容



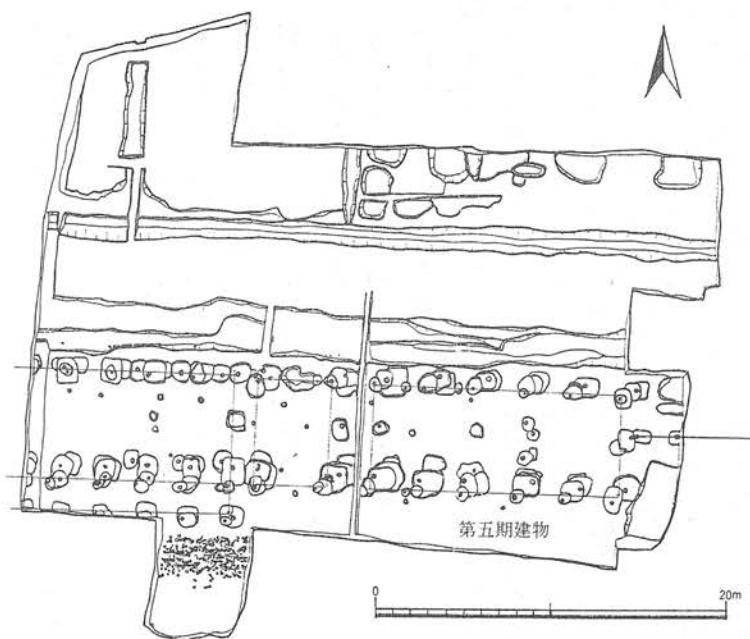
下端に逆V字状の切り込みが見られ、二次的転用の可能性をもつ。裏面は縦方向に板面がはじけ、文字の判読が出来ない。なお、積文



は平川南氏の解説に依った。

9 関係文献

水沢市教育委員会『昭和六〇年度胆沢城跡発掘調査概報』（一九八六年）  
（佐久間 賢）



青森・浪岡城跡 なみおか

1 所在地 青森県南津軽郡浪岡町

2 調査期間 北館と西館間の堀跡 一九八四年(昭59)四月～  
一九八五年一二月、北館北側の堀跡 一九八五年  
六月～七月

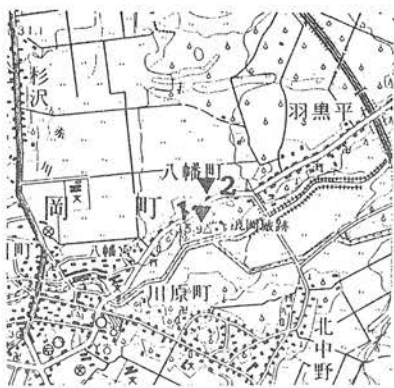
3 発掘機関 浪岡町教育委員会

4 調査担当者 工藤清泰・木村浩一

5 遺跡の種類 中世城館跡

6 遺跡の年代 一五世紀後半～一六世紀末

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(青森西部)

浪岡城跡は、青森市と弘前市のほぼ中間、津軽平野の東側に位置し、浪岡町市街地より約1km東の低丘陵の末端を切り崩し、自然の河川と人工的な導水による堀により八つの郭に区画されている。堀は中土塁を持ち二重・三重の形態を見せ



(1)



(2)

ている。発掘調査は一九七八年（昭53）から継続されている。

(1)号木簡は、北館と西館の間の堀跡を調査した際、北館と命名されている郭の北西辺の堀から出土している。発掘箇所の上部平場には、榊形遺構がみられ、橋の架っていた可能性もあるが、遺物との関係は不明である。伴出遺物としては陶磁器類・木製品・骨類・石製品・鉄製品・銭貨・自然遺存体などがある。

一方、主要地方道青森浪岡線の改良工事に伴って行われた北館の北側にあたる堀部分二三七mの緊急調査では、シガラミ状遺構・二本の堀跡と性格不明な遺構二カ所が検出され、そのうち、性格不明遺構の一つから(2)号木簡が出土した。伴出遺物としては、青磁・染付・美濃等の陶磁器類、漆器・折敷・箸・曲物等の木製品等が出土している。

8 木簡の積文・内容

(1) 「梵字」

488×38×2.5 061

(2) ×号一経其×

(320)×(170)×16 081

×身心×

(1)は、光明真言全文が中左右中…と配されたもので、文字部分が浮き出た状態で残っている。形態と合わせると、柿経と考えられる。かなり大形のものである。

(2)の文字は墨が残っておらず、墨痕がわずかに盛り上がる形で残っていた。卒塔婆・板碑・盤・看板等の機能が考えられるが、破損品であり、内容も不明のため定かではない。

9 関係文献

浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅷ』（一九八六年）

同『浪岡城跡―主要地方道青森浪岡線特殊改良一種工事に伴う発掘調査―』（一九八六年）

（木村浩一）

# 山形・俵田遺跡 たわらだ

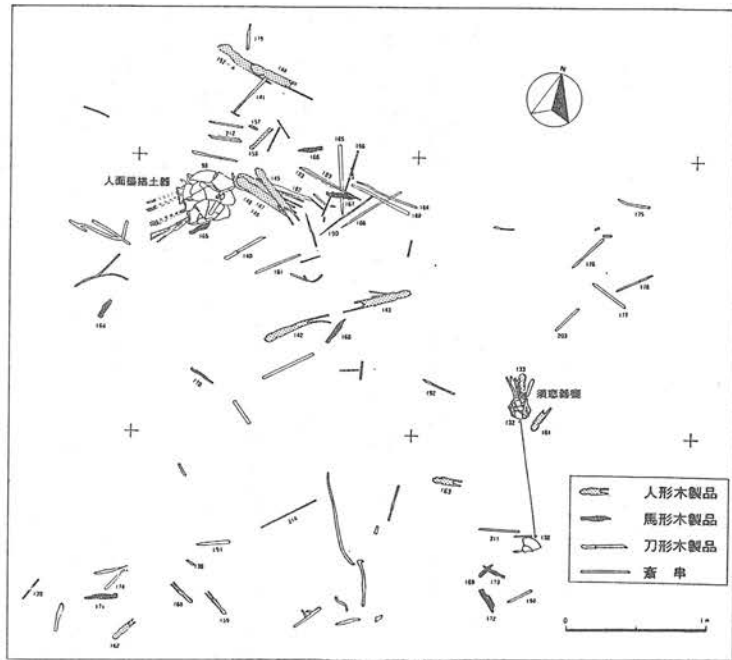
- 1 所在地 山形県飽海郡八幡町大字岡島田字俵田
- 2 調査期間 一九八三年(昭58) 四月～六月
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 安部 実・佐藤庄一
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 八世紀～十一世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(酒田)

俵田遺跡は、山形県北西部にあたる庄内平野の北半に位置する。酒田市街より北東約7km、飽海郡八幡町大字岡島田字俵田を中心とした水田中にあり、遺跡の北西約一・八kmに国指定史跡城輪柵跡が所在する。

調査は農村基盤総合パイロット事業に依るもので、第一次調査を一九七八年(昭53)に、第二次調査を一九八三年(昭58)に実施した。墨書のある人形等を出



SM60祭祀遺構平面図

土したSM60祭祀遺構は第二次調査で発見されたものである。祭祀遺構は、約5m四方の範囲内に、人面墨描土器、須恵器小甕、木製の人形・刀形・馬形・斎串などの遺物一二〇点が、祭場としての配置をほぼ原形のまま留めた形で検出された。これは本遺構が河



跡からごく近い場所にあったことを考慮すると、一時は祭場としての配置がなされたものが、その後の河の氾濫によって急激に埋められたために起こった稀な現象と考えられる。

墨書は、人面墨描土器一点と、木製人形七点に認められる。墨書のある人形は、すべて人面墨描土器の周辺から出土している。

8 木筒の積文・内容

(1)  503×46×8 061

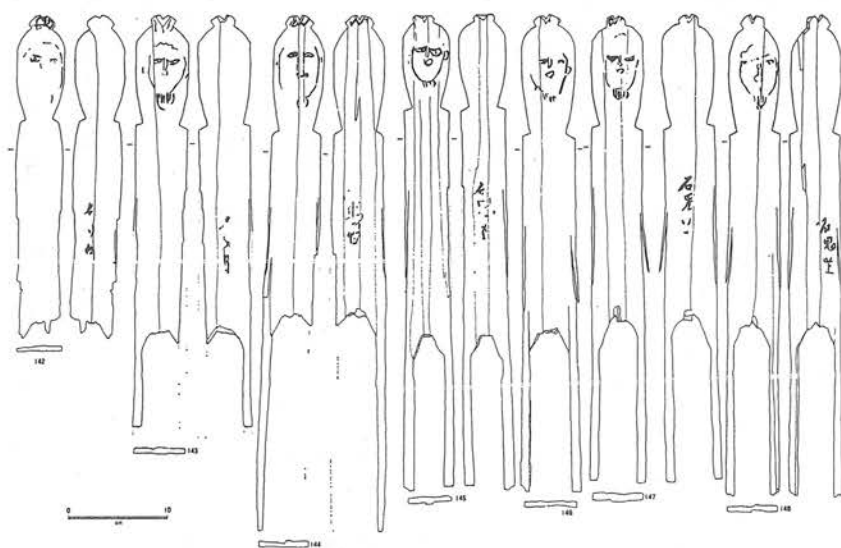
(2)  486×23×9 061

(3)  504×54×6 061

墨書のある人形は、顔が倒卵形を呈し、肩の線が水平ないわゆる怒り肩になるものである。手の部分に切り込みがあり、股部は台形に切り込んだ後で折り取られている。表面にはすべて墨書によって顎鬚を加えた顔の表現がなされ、裏面に三文字の墨書が認められる。人面墨描土器にも「碓鬼坐」の墨書が認められることから、人形裏面の三文字は、すべて「碓鬼坐」であった可能性が高い。

積文については、一応「イソオニマシマス」と読んでいるが、上の二文字については「シキ」と読むことも可能である。

木製模造品の一部は、八世紀初頭に成立した大宝神祇令に規定さ



人形木製品

れた国家的祭祀と関連しており、その具体的内容は『延喜式』によつて一応知ることができる。同式の四時祭・祝詞の大祓条によると、穢を負わせた人形を四国の卜部が祓所に解除することがみえて  
いる。

本遺構の性格を考える場合、近郊にある出羽国府（城輪柵跡）との関連は見逃せない。宮都を中心に行われていた祭祀が、地方行政機関を通じて次第に広まっていったと考えられており、地方行政の中心である出羽国府においても同様な祭祀が伝えられていたことがうかがえる。SM六〇祭祀遺構の時期は人面墨描土器の形態からみて九世紀中葉頃と推定されるが、現に嘉祥三年（八五〇）に、全国に先駆けて出羽国に陰陽師が派遣されているのである。

## 9 関係文献

山形県教育委員会『俵田遺跡第2次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第77集 一九八四年）

金子裕之「人形―古代・中世のひとがた」〔中世の呪術資料〕第四回中世遺跡研究会レジュメ 一九八四年）

佐藤庄一「俵田遺跡の祭祀遺構」〔『えとのす』第26号 一九八五年）  
安部 実「山形県俵田遺跡第二次調査」〔日本考古学年報36』一九八六年）

（佐藤庄一）

# 木簡研究 第五号

巻頭言——木簡史の研究について——

関 晃

一九八二年出土の木簡

- 概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 白毫寺遺跡 藤原宮跡 山田寺跡 阿部六ノ坪遺跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長岡京跡(4) 仁和寺南院跡 大坂城跡 梶子遺跡 道場田遺跡 野畑遺跡 穴太遺跡 下野国府跡 下野国府跡寄居地区遺跡 長原東遺跡 多賀城跡 弘田柵跡 日野川朝宮橋下流 桜町遺跡 出合遺跡 辻井遺跡 助三畑遺跡 肩脊堀の内遺跡 草戸千軒町遺跡 田村遺跡 高畑麿寺 藤田遺跡 一九七七年以前出土の木簡(五)
- 藤原宮跡

字訓史資料としての平城宮木簡

——古事記の用字法との比較を方法として——

平城宮出土の衛士関係木簡について

小林 芳規

木簡とコンピュータ

鬼頭 清明

書評・『草戸千軒——木簡——』

田中 琢

彙報

水藤 真

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

向日市文化資料館発行

『よみがえる古代の文字』

——近畿出土の文字資料が語る都城・郡衙・寺院・集落——』

一九八六年一〇〜十一月に開催された特別展示の図録。近畿を中心に集めた墨書土器・木簡・漆紙文書等発掘された文字資料のハンディな史料集になっている。

(B五版、三二頁、一九八六年一〇月、頒価三〇〇円、〒二〇〇円、〒617京都府向日市寺戸町南垣内四〇の一 向日市文化資料館)

## 木簡研究 第六号

卷頭言——記紀批判と木簡——

直木孝次郎

一九八三年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 平城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏餉屋下層遺構 藤原宮跡 長岡宮・京跡 平安京右京八条二坊 定山遺跡 水走遺跡 津堂遺跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 万町北遺跡 山垣遺跡 福成寺遺跡 沢田宮谷遺跡 長尾沖田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡 宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大萱遺跡 篠脇遺跡 北稻付遺跡 鯉沼東Ⅱ遺跡 下野国府跡 多賀城跡 一乗谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作国府跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡 一九七七年以前出土の木簡(六)

平城宮跡(第三二次)

平安時代の日記にみえる木簡

山田 英雄

日本古代の人口について

鎌田 元一

彙報

『木簡研究』一～五号総目次

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

福井・日野川朝宮橋下流出土の木簡補訂

本誌第五号で報告した、福井県丹生郡清水町日野川朝宮橋下流出土の木簡は

・「象馬牛<sup>〔羊カ〕</sup>半<sup>〔奥カ〕</sup>輦□車乘田業僮僕人□衆多□

・「出入息利乃□□□□□□□□□□」

と釈読したが、これは妙法蓮華経卷第二妙法蓮華経信解品第四に見える偈中の一節

象馬牛羊 輦輿車乘 田業僮僕 人民衆多

出入息利 乃遍他国 商估賈人 無處不有

を記したものであることが判明した。

(編集部)

木簡研究 第七号

巻頭言—刀筆の吏—

土田直鎮

一九八四年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京跡 奈良女子大学構内遺跡 法貴寺遺跡  
 藤原宮跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 百々遺跡  
 今里遺跡 平安京左京八条三坊二町 平安京左京九条二坊十三町  
 水走遺跡 西ノ辻遺跡(1) 西ノ辻遺跡(2) 坪井遺跡 忍ヶ丘駅前遺跡  
 普賢寺遺跡 大庭北遺跡 輕里遺跡 堺環濠都市遺跡 池田寺遺跡  
 道場塩田遺跡 新方遺跡 川岸遺跡 倉見遺跡 前東代遺跡  
 赤堀城跡 朝日西遺跡 清洲城下町遺跡 杏掛城跡 吉田城三ノ丸跡  
 坂尻遺跡 秋合遺跡 郡遺跡 神明原・元宮川遺跡 北条泰時・時頼邸跡  
 千葉地遺跡 千葉地東遺跡 蔵屋敷遺跡 小敷田遺跡 大津城跡  
 上永原遺跡 野々宮遺跡 野瀬遺跡 小谷城城下町遺跡 尾上遺跡  
 北方田中遺跡 永田遺跡 膳棚B遺跡 御前清水遺跡 仙台城三ノ丸跡  
 市川橋遺跡 多賀城跡 比爪館遺跡 大浦遺跡 弘田柵跡  
 馬場屋敷遺跡 百間川当麻遺跡 鹿田遺跡 草戸千軒町遺跡  
 西庄II遺跡 井上薬師堂遺跡 荒堅目遺跡

一九七七年以前出土の木簡(七七)

平城宮跡(第三九次)

公式様文書と文書木簡

早川庄八

中国における最近の漢簡研究

大庭 脩

英国出土のローマ木簡

田中 琢

木簡史料紹介—牛札—

石上英一

彙報

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円

## 新瀉・番場遺跡

- 1 所在地 新瀉県三島郡出雲崎町大字小木字番場
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)四月、一九八五年五月～八月
- 3 発掘機関 新瀉県教育委員会
- 4 調査担当者 坂井秀弥
- 5 遺跡の種類 集落跡・水田跡
- 6 遺跡の年代 平安時代中期・鎌倉時代～江戸時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



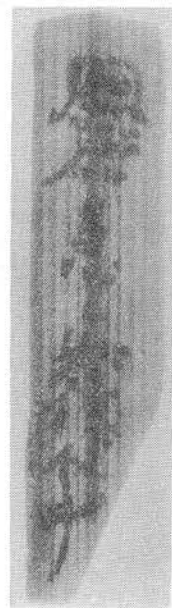
(出雲崎)

番場遺跡は信濃川の小支流である島崎川の谷に位置し、背後に低い丘陵をひかえる。標高約四〇mである。丘陵裏手すぐには小木ノ

城下と考えられる小木の集落(字「タテ」)があり、その要害小木ノ城とは約三km離れている。

調査は国道一一六号出雲崎バイパスの建設に伴い、一九八四年四月に確認調査(当遺跡の発見)、翌年五月～八月に本調査(約四四〇

〇㎡)が実施された。



遺跡は平安時代中期の鍛冶工房、鎌倉時代・南北朝時代を中心とする屋敷跡・水田跡で、後者が主体をなす。木簡もこの時期のものである。屋敷跡の中心をなすのは、斜面を削平して建てられた四間×六間の四面廂をもつ総柱の掘立柱建物で、このほかに掘立柱建物数棟、井戸数基があり、これらが有力者層の屋敷を形成すると考えられる。この屋敷に接した低い部分に水田跡があり、その上手に水田の用水源とみられる横井戸が存在する。木簡は横井戸周辺から二点、水田跡縁辺から二点出土したが、文字が判読できるのは横井戸周辺の一点のみである。

### 8 木簡の積文・内容

- (1) 「符籙」急々如律令」

114×25×3 051

(坂井秀弥)



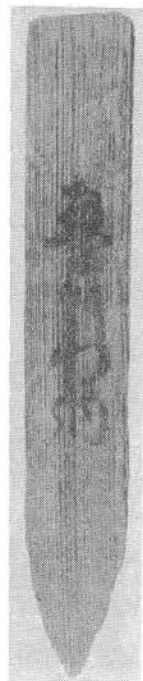
島根・富田城跡とだ（菅谷地区）

- 1 所在地 島根県能義郡広瀬町富田
- 2 調査期間 一九八二年（昭57）三月
- 3 発掘機関 島根県教育委員会
- 4 調査担当者 鳥谷芳雄
- 5 遺跡の種類 城館跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 室町時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（松江）

富田城跡は、飯梨川の東岸、標高一八四mの月山を中心とした山城跡で、国指定の史跡である。周辺には富田城に関連した中・近世の遺跡が数多く残されており、島根県教育委員会ではこれら遺跡群の総合整備計画を策定する目的で、昭和五四年度から四カ年をかけて周辺地区の発掘調査を実施した。菅谷地区は五六年度の調査区である。同地区は月山の北側に位置し、新



宮谷入口から南側に伸びる小さな谷であるが、月山中腹の山中御殿平へ通じる入口の一つとして富田城の防禦上重要なところとされている。発掘調査の範囲はごく一部に限られたが、屋敷跡とみられる石列遺構（時期不明）が検出された。木簡は、谷の入口部分より出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) 「惣右衛門納」

196×31×5.5 051

当木簡には年紀が記されており、使用年代を明確にしがたいが、書体などからすると、近世（江戸時代前半か）のものと思われる。木簡が出土した附近はもと城安寺のあったところとされるから、あるいはこれに関係したものかとも思われる。

9 関係文献

島根県教育委員会『史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書』（一九八三年）

（鳥谷芳雄）

文字資料でサマーセミナー

去る七月二四日～二六日、第一四回古代史サマーセミナーが栃木県鹿沼市で開かれた。その中で「在地社会と文字資料―東国を中心として―」と題して、関東地方の文字瓦・墨書土器・漆紙文書・木簡を題材とした報告が九本準備され、レジュメ集が作られた。

### 『平城宮木簡 四』の刊行

平城宮跡出土木簡の正報告書としての第四集が刊行された。対象となるのは昭和四一年に宮の東南隅で実施された第三二次補足調査で出土した木簡である。同調査では宮の南を限る大垣の北を流れる東西溝から一万二千点をこえる大量の木簡が出土した。削屑がその大半を占めるとはいえ、式部省で行われる考課・選叙の関係木簡がまとまって出土している。すでに『平城宮発掘調査出土木簡概報』四の中に積文の一部が略報告されているが、その正報告書にあたる。同調査の一万二千点余の木簡を一冊でまとめることは困難なため、三分冊に分けて刊行することとなり、『平城宮木簡 四』はその第一分冊である。約二千五百点の木簡の写真図版と別冊の「解説」よりなり、「解説」には遺構の概要・考選木簡の分析・釈文等が掲載されている。

奈良国立文化財研究所発行

(コロタイプ 図版一二〇枚 解説A五版・本文四一四  
頁 一九八六年三月刊 頒価二五、〇〇〇円、**〒一、五  
〇〇円** 解説のみ三、六〇〇円、**〒四〇〇円**)

奈良市橋本町三六番地 榊明新印刷

# 福岡・如法寺遺跡

1 所在地 福岡県豊前市大字山内

2 調査期間 一九八一年(昭56)七月～八月

3 発掘機関 豊前市教育委員会

4 調査担当者 酒井仁夫

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 平安時代後期～鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

如法寺遺跡は、豊前市街地より南に約8kmの小高い山に囲まれた谷間にある。この寺はもと、求菩提山護国寺(天台宗)の末寺の一つ、写経所と考えられているところである。発掘調査は、求菩提山と共に国の史跡指定申請のための、事前調査であった。

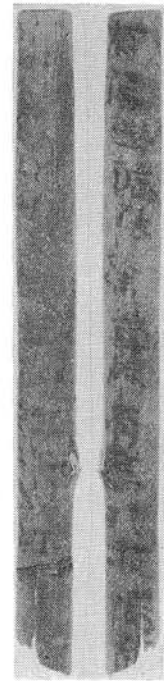


(中津)

調査前から、経筒の破片等が採集され、あらかじめ遺構の存在が予測されていた。調査では、平安時代末

の遺構や遺物、それに鎌倉時代初期の遺物なども検出された。

木簡は、成就院という地名の場所で検出された遺物包含層から出土した。地層の下は地下水の浸透があり、木質類の保存状態は良好であった。木簡と共に、多くの護摩に投入される乳木などが検出された。



8 木簡の釈文・内容

(1) ・「有漏無漏□除尊□有漏非□漏□



186×(16) 019

不空訳「九品往生阿弥陀三摩地集陀羅尼經」に「離有漏永入無漏」とあるなど、有漏・無漏は仏教語である。この木簡は経巻片であろう。

9 関係文献

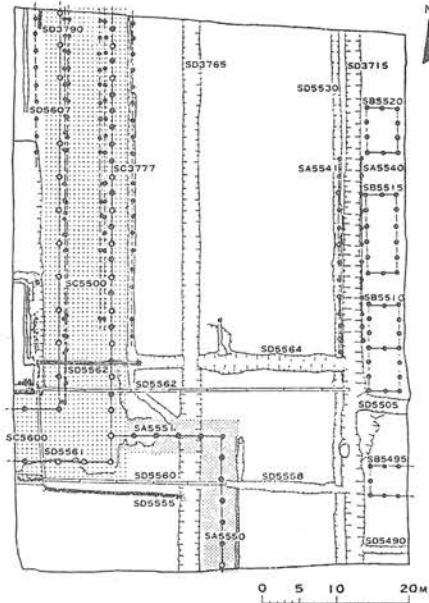
豊前市教育委員会『如法寺 豊前市文化財調査報告書第四集』  
(一九八三年) (重松敏美)

## 奈良・平城宮跡（第四次調査）

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六七年（昭42）七月～一月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 杉山信三
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

第四次調査地は平城宮第一次大極殿院築地回廊東南隅付近で、第一次朝堂院区画施設との接合部を含む地域である。面積は四二〇〇㎡である。

検出した主な遺構は、大極殿院東面築地回廊SC五五〇〇、南面築地回廊SC五六〇〇、朝堂院の東北隅部分を区画する掘立柱塀で、後に築地に改作されるSA五五五〇・五五五一、宮内基幹排水路の南北溝SD三七六五、SD三七六五を東に移動して設けられた南北溝SD三七一五、SC五五〇〇の西側雨落溝SD三七九〇、東側雨落溝SD五五七五、SD五五七五から南東に流れてSD三七六五に注ぐSD五五八四、大極殿院内の排水を受けSC五六〇〇を横断する暗渠SD五五五六、SD五五五六から東へ折れSD三七六五に流



入する暗渠SD五五五五、SD五五五六を改作したSD五五六一、SD五五六一から東へ折れる暗渠SD五五六〇、SD五五六〇から東へ延びてSD三七一五に流入する開渠SD五五五八、SC五五〇〇を横断しSD三七一五に排水する東西暗渠SD五五六二、SD五五六二の北で同じくSC五五〇〇を横断する暗渠SD五五六三、SD五五六三から東へ延びてSD三七一五に流入する開渠SD五五六四、第二次大極殿・朝堂院地域からSD三七一五に流入する東西溝SD五四九〇・SD五五〇五などである。このうちSA五五五〇・五五五一は霊亀頃以降に設けられ、それに伴いSD三七六五が東に移動しSD三七一五となる。

木簡が出土したのは、SD三七六五、SD三七一五、SD三七一五の西岸にあり、同溝よって破壊されている土壌SK五五三五、SD五五六四、SD五四九〇の五カ所である。

SD三七六五は幅一・六～二・六m、深さ〇・六mで、木簡から和銅年間に存在したことがわかる。一点出土したが断片が多い。

SD三七一五は幅二～三m、深さ一mで、堆積土は上下二層に大別できるが、水流のためか乱れがあり、層位による時期・内容の区分はできない。七六五点出土したが上層からの出土が多い。木簡の年紀から溝が霊亀頃から奈良末まで存続したことがわかる。

SK五五三五は幅一・八m、深さ〇・三mの不整形の土壌で、霊亀元年（七一五）銘のあるものを含む一七点の木簡が出土した。

SD五五六四は幅二～三m、深さ〇・六mで、堆積状況からするとSD三七一五が逆流した形跡があり、木簡の性格もSD三七一五のものと同類とみなしうる。八点出土した。

SD五四九〇は幅一m、深さ〇・二mある。木簡は七三点出土したが判読不能のものが多く。

## 8 木簡の积文・内容

SD三七一五から内容的に興味深いものが多数出土しているが、その中では兵衛府・中衛府に関するものが注意される。兵衛府から中衛府に宛てたものがあるので、中衛府あるいはその関連の官衛・施設で廃棄されたとみられる。人名を列記したものがあがるが、中衛

の交名であろうか。中衛府は神亀五年（七二八）から大同二年（八〇七）まで存続し、内裏周辺の警衛や供奉に従っていたとみられるので、木簡が廃棄地点からあまり流下していないとすれば出土地近辺に中衛府の詰所的施設のあった可能性が考えられる。

付札では貢進物荷札は少なく、海産物等の食料品の物品付札が多い。出土場所からみて内裏などでの宴会用の食料品であったかもしれない。

このほか『続日本紀』神護景雲三年六月乙巳条の任官記事とほとんど一致する記載のあるものが注目される。

年紀の知られるものは神護景雲三年が右記のものを含め三点、宝亀元年が一点あり、他の木簡もこの時期頃のものとも矛盾しない。

### 溝SD三七六五

- (1) 和銅  091
- (2)  一之郡末滑海 × (81) × 17 × 4 039
- (3)  以前等三物 091
- (4)  『更級郡』

忍麻呂前

・ 謹人  『謹  』

(140) × 12 × 4 081

(5) □□□□魚八斤五兩

(117)×6×4 081

(8) 「請繩參拾了 右為付御馬并夜行馬所請」

溝SD三七一五

「如件 神護景雲三年四月十七日番長非淨浜」

323×25×4 011 \*

(6) 兵衛府移中衛□<sub>[府カ]</sub>

091

(9) 兵衛等充行夜使如件

091

(7) ×衛府移 中衛府 一番正八位下□□□□<sub>[賀茂カ]</sub>

(10) 「真竜列 □部真神 物部老」

×□仍故移

(192)×11×3 081 \*

「阿奈石□□□□人合四人」<sub>[赤カ]</sub>

152×13×4 011 \*

(11) 「式部大□<sub>[輔大伴益立]</sub>

伊賀守伊勢子老 遠江介藤井川守 出雲□□<sub>[守布カ]</sub>

内倉介安□<sub>[倍]</sub>草万呂

美野守石上息繼

周方守弓削秋万呂 兼勢□□<sub>[人主]</sub>

伊与守高円広□<sub>[世カ]</sub> 下総員外□<sub>[介カ]</sub>

桑原王□<sub>[兼カ]</sub>

「下野介当□<sub>[麻王]</sub>

□<sub>[伊伎カ]</sub> 守田部息万呂

□<sub>[右兵衛]</sub> 介弓削広□<sub>[方]</sub>

能登□<sub>[守石川人麻呂]</sub>

左馬司頭牟□<sub>[都支カ]</sub> 王

右大舍人介□<sub>[文屋カ]</sub> 万呂

員外介□<sub>[弓削薩]</sub> □<sub>[麻]</sub>

右衛士督備泉

玄蕃□<sub>[助]</sub> 相模波□<sub>[伊波カ]</sub>

343×37×3 011 \*

- |      |   |          |                      |
|------|---|----------|----------------------|
| (12) | □<br>□<br>□ <sup>[衛府カ]</sup><br>□ <sup>[人カ]</sup><br>□<br>□<br>□ <sup>[衛府カ]</sup><br>□ <sup>[人カ]</sup><br>□ <sup>[衛府カ]</sup><br>□ <sup>[人カ]</sup><br>□ <sup>[衛府カ]</sup><br>□ <sup>[人カ]</sup><br>□ <sup>[衛府カ]</sup><br>□ <sup>[人カ]</sup> | 半大初位上若湯坐 | (135) × 23 × 3 081   |
| (13) | □   |          | (155) × 15 × 5 051   |
| (14) | ・「仕丁合拾五人」 <sup>[人カ]</sup><br>□ <sup>薪取</sup><br>□ <sup>[人カ]</sup>   |          | (203) × (41) × 2 081 |
| (15) | ・造花所□□□□ <sup>[人請カ]</sup><br>・飯参斗陸升<br>・六月六日雀部石麻呂   |          | (175) × 25 × 2 081   |
| (16) | ・「厨 請飯」□□<br>・□□□□□□□□□□ <sup>[依員カ]</sup>   |          | (97) × (26) × 3 081  |
| (17) | ・請食 石寸建万呂 作日朝夕者<br>・四月廿四□□□□ <sup>[日カ]</sup> <sup>[廿カ]</sup> 東万呂附   |          | (178) × (29) × 3 081 |
| (18) | ・「請酒壺斗伍升」<br>□ <sup>[將監曹司]</sup> <sup>[請カ]</sup><br>□ <sup>[將監曹司]</sup><br>□ <sup>[將監曹司]</sup><br>□ <sup>[將監曹司]</sup>   |          | (62) × (26) × 2 081  |
| (19) | 野中大成<br>海部稻□□   |          | (109) × (24) × 3 081 |
| (20) | 三斗九升<br>主税大允船□□ <sup>[住カ]</sup>   |          | 091                  |
| (21) | 田益足 凡河内小成   |          | 091                  |
| (22) | 民金麻呂  |          | 091                  |
| (23) | ・×比 葛木毛人 余□□  |          | (152) × 11 × 3 081   |
| (24) | ・□ □ 合四人  |          | 091                  |
| (25) | □少属従七上輕部造兄□   |          | 091                  |
| (26) | ・□□□□□□□□□□ <sup>[万呂カ]</sup><br>□□□□□□□□□□ <sup>[繩カ]</sup>  |          | (303) × (50) × 5 081 |
|      | 景雲三年八月三日□□□□  |          | (303) × (50) × 5 081 |



- (27) 右京一条三坊□□<sup>〔冊カ〕</sup>内□□ 091
- (28) 「尾張国×  
・調塩三× (65)×20×3 019
- (29) 「進上錢一百冊文」  
・「丹比宅万呂」<sup>〔</sup> 71×11×2 033
- (30) ・田部稻人 大伴  
×伴小刀良 鳴□□  
□□ □□  
・ □□
- ×人 合十 □足 (109)×39×2 081
- (31) ・外衛府□□□□ (102)×(50)×3 081
- (32) ・×鳳至郡<sup>〔</sup>  
・×美崎所生<sup>〕</sup> (56)×16×3 019
- (33) 飛驒国□□ (111)×(10)×2 081
- (34) 「蘇甲羸交作鮑一塙」 102×50×3 051
- (35) 「薄鯪卅七斤<sup>五編</sup>」<sup>〔</sup> 170×26×5 031 \*
- (36) 「蒸鮑壹籠、別卅口」 148×24×3 051 \*
- (37) 「蠟腊三籠」 160×24×3 051 \*
- (38) 「雜魚楚割一籠」 130×25×3 051 \*
- (39) 「雜魚腊」 106×21×3 051
- (40) 「押年魚上」<sup>〔</sup> 61×14×3 031 \*
- (41) 「鹿六」<sup>〔</sup> 68×17×3 032 \*
- (42) 「伊知比古」<sup>〔</sup> 57×20×3 032 \*
- (43) ・「乃止浄麻呂乃官」  
徳足徳徳鳳至<sup>〕</sup> 119×30×13 011
- ・「謹浄繼繼人」  
□□□□□□□□<sup>〔</sup>  
解カ<sup>〕</sup>

(44) 「 飯飯飯飯

飯飯飯

請<sup>〔飯〕</sup>四升四合

飯飯<sup>〔飯〕</sup>

『御曹司』中

飯

□□<sup>〔造〕</sup>飯三升

口徑255~262, 高さ15 061

土壙SK五五三五

(45) 靈龜元年九月

(151) × (16) × 4 081

(46) 靈

(30) × (15) × 4 081

溝SD五五六四

(47) ・「去勝宝九歳」

・「奈良□□五」

69 × 19 × 3 051

(48) 一升人給□□<sup>〔料カ〕</sup>又□□

091

(49) 「熬海鼠」

127 × 17 × 2 051 \*

溝SD五四九〇

(50) 「〱揖保郡二斗九升」

206 × 20 × 4 032

(51) ・英多郡

・奈羅<sup>〔列カ〕</sup>□□□

□支部力一斗五升□□□□

(98) × 20 × 4 059

(52) ・天山司解 進上飛炎卅九枝

・ 『勘』

(236) × 38 × 4 081

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅺ』(一九八二年)

同『奈良国立文化財研究所年報一九六八』(一九六八年)

(加藤 優)

## 『平城京左京三条二坊六坪

### 発掘調査報告』の刊行

現在、奈良市庁の南西約二〇〇mの所に復原・整備されている特別史跡・宮跡庭園の発掘調査報告書が刊行された。調査は昭和五〇～五九年までの間に行われ、総面積六六〇〇m<sup>2</sup>に及ぶ。京内の一坪の様相が明らかになるとともに坪の中央に屈曲した石組の園池が発見され、奈良時代の庭園の実例として貴重な遺跡である。発掘調査では一〇二点の木簡が出土しており、和銅年間の貢進物の荷札や、「北宮」「竹野王子」「御坏物」「中務省」など注目すべき語句を記す木簡が多い。特に「北宮」は長屋王室の吉備内親王邸と考えられ、古代史研究においても興味深い内容をもつものといえる。奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』『平城宮発掘調査出土木簡概報』(注・由)などに略報告されているが、本報告ではそれらをまとめ、一点ごとに解説を付けており有益である。

奈良国立文化財研究所

『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』

(A四版・本文一一六頁・図版四〇枚・一九八六年三月刊)

頒価 四、五〇〇円 千四五〇円 真陽社

『弘田柵跡Ⅰ—政庁跡—』刊行される

秋田県仙北郡仙北町にある、古代城柵跡として知られる弘田柵跡の政庁地区部分の正式報告書が刊行された。扱っているのは一九七七年から八三年までに実施した第一二・一三・二八・三五・四七・五三および補足調査である。これらの調査の結果、弘田柵跡は外郭、内郭と政庁跡の複郭構造をなしていることや、政庁の構造・変遷などが明らかとなった。

内容は、第Ⅰ章 遺跡の概要、第Ⅱ章 弘田柵跡をめぐる研究史、第Ⅲ章 調査の経過と記録の方法、第Ⅳ章 遺構、第Ⅴ章 遺物、第Ⅵ章 考察、第Ⅶ章 結語、別編、付図、からなる。「別編」には、木簡二三点をはじめ、多数の墨書・刻書土器などを収録した「出土文字集成」と「弘田柵跡関係文献目録」がおさめられている。

秋田県教育委員会弘田柵跡調査事務所編集、秋田県埋蔵文化財振興会発行、三〇五頁、頒価五、五〇〇円、〒五〇〇円

## 木簡学会会則

第一条 本会は木簡学会と称する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用を資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つぎの事業を行う。

- 1 木簡に関する情報の蒐集および整理
- 2 研究会の開催
- 3 会誌『木簡研究』その他の刊行
- 4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力
- 5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。

二 本会に入会しようとするものは、会員二名の推薦を必要とし、委員会の承認を得なければならない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

の他の前条の事業に参加することができる。

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

- 1 会長一名
- 2 副会長二名
- 3 委員若干名
- 4 監事二名

第七条 委員・監事は総会において選出され、任期は二年とする。ただし、再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもつき会務を処理する。  
三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金をもってあて、総会において会計報告を行うものとする。

第十条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十一条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。

## 彙報

### 第七回総会および研究集会

木簡学会第七回総会と研究集会は、一九八五年二月七日・八日  
両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、約一四〇名の参加者を得て開催された。会場には平城宮跡、平安京跡、柚井遺跡(三重)、西河原森ノ内遺跡(滋賀)、神明原・元宮川遺跡(静岡)等出土の木簡や、飛鳥京跡出土木簡の写真が発掘関係機関の協力を得て展示され、関心をよんだ。

◇二月七日(土) (午後一時～五時三〇分)

第七回総会(議長 林 紀昭氏)

最初に岸俊男会長が挨拶に立ち、情報収集に関する会員の協力要請と、保存処理の重要性に対する提言があったあと、林紀昭氏を議長に選出して議事に入った。

会務・編集報告(鬼頭清明委員)

一年間の活動と現状につき、会員は新入会員一七名を加えて二八〇〇名となったこと、会誌七号の編集状況、七号の売価を一冊三八〇〇円、送料四〇〇円と決定したこと等の報告があり、承認された。

会計報告(岩本次郎委員)

一九八四年度の収支について説明があり、ひきつづいて関見監事より会計執行は正当である旨の会計監査報告があつて、異議なく承認された。

研究集会(司会 狩野 久氏)

中国簡牘研究の現状

李 学勤

木簡と紙との接点

藤枝 晃

李氏の発表は本誌に収載した。藤枝氏の発表は、欧州所在の敦煌・トルファン資料の調査をふまえ、木簡と紙の使い分けや木簡と写経の寸法との共通点を論じられたものである。

研究集会終了後、グリラ友楽で懇親会が開かれた。

◇二月八日(日) (午前九時～午後三時三〇分)

研究集会(司会 佐藤宗諱・原秀三郎氏)

一九八五年出土の木簡

館野和己

柚井遺跡出土木簡補考

栄原永遠男

飛鳥京跡出土の木簡

亀田 博・岸 俊男

館野報告は、一九八五年に出土した木簡と八四年以前出土で未報告の木簡をとりあげたものである。栄原報告については本誌を参照されたい。なお館野報告に関連して、参加された関係者から神明原・元宮川遺跡(静岡)、西河原森ノ内遺跡(滋賀)、平安京、下野国府(栃木)についての追加報告があつた。

昼休みをはさんで行われた亀田・岸報告は、『日本書紀』天武・持統紀の記事に関連するとして話題を呼んだ木簡に関するものである。

各報告については、いずれも活発な質疑討論があり、総括討論で締めくくった。また昼休みには、平城宮第一六九次の調査で出土した大嘗宮の遺構を見学した。最後に平野副会長より挨拶があり、参加者への謝辞とともに、新入会の申込みは九月末までに手続きを終えてほしいこと、一層の情報収集をめざすべきことなどの伝達・提言があつて会を閉じた。

#### 委員会報告

◇一九八五年二月七日(土) 於奈良国立文化財研究所

総会に先立ち、新入会員四名の承認、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営等について検討が行われた。席上、新入会の申込みは九月末必着、一〇月の委員会承認の運びとし、一二月の委員会では新入会員の承認を議題としないことが決定された。また各地で情報収集にあたる人材を確保することが話題となった。

◇一九八六年六月五日(木) 於奈良国立文化財研究所

新入会員九名の承認、一九八五年度の会計報告の他、『木簡研究』八号の編集、八六年度総会・研究集会の予定について討議した。

◇一九八六年一〇月二七日(月) 於奈良国立文化財研究所

新入会員四名の承認、会務の現状、一九八五年度の会計、八六年度前半の会計、会誌八号の編集状況、総会・研究集会の日程等が討議された。また次期委員についても検討され、六五歳定年を実施し、委員が在任中六五歳に達した時は任期切れを以て引退するという方向で議論された。また地方公共団体保管の木簡については、憂慮すべき保存状態にあるものもみられるので、早急に学会として対策に取り組んでゆくことが確認された。

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY  
FOR THE STUDY  
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 8 1986

CONTENTS

Forword—The Work that should be Survived in Eternity  
..... Kazuo Aoki..... i

Wooden Tablets Excavated in 1985..... 1

Outline

Explanatory Notes

Nara Palace Site, Nara Prefecture; Remains of Nara Capital Eastern  
3rd Ward on 6th Street, Nara Prefecture; Remains of Nara Capital  
Western 1st Ward on 7th Street, Nara Prefecture; Nagaoka Capital  
Site (1), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site (2), Kyoto Prefecture;  
Nagaoka Capital Site (3), Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital  
Eastern 3rd Ward on 3rd Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto  
Capital Eastern 1st Ward on 6th Street, Kyoto Prefecture; Remains of  
Kyoto Capital Eastern 3rd Ward on 9th Street, Kyoto Prefecture;  
Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 8th Street, Kyoto  
Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 8th Street,  
Kyoto Prefecture; Remains of Toba-rikyu, Kyoto Prefecture; Fushimijo  
Castle Site, Kyoto Prefecture; Remains of Nishinotsuji, Osaka Pre-  
fecture; Remains of Kannonji, Osaka Prefecture; The Temple Site in  
Inukaido, Osaka Prefecture; Remains of Hozumi, Osaka Prefecture;  
Remains of Tamatsu-Tanaka, Hyogo Prefecture; Remains of Tsujii,  
Hyogo Prefecture; Remains of Nagao-Okita, Hyogo Prefecture; Pre-  
sumptive Remains of Tajima-kokufu, Hyogo Prefecture; Remains of



Asahi-nishi, Aichi Prefecture; Remains of Obuchi, Aichi Prefecture; Kutsukakejo Castle Site, Aichi Prefecture; Katsumatajo Castle Site, Shizuoka Prefecture; Remains of Shinmeibara-Motomiyagawa, Shizuoka Prefecture; Remains near Imakoji Street, Kanagawa Prefecture; Remains in Tsurugaoka-Hachimangu Shrine, Kanagawa Prefecture; Remains of Kashima, Ibaraki Prefecture; Remains of Nishigawara-Morinouchi, Shiga Prefecture; Remains of Kangakuin, Shiga Prefecture; Kongojijo Castle Site, Shiga Prefecture; Remains of Kakyudo, Shiga Prefecture; Remains of Hokaiji Temple, Tochigi Prefecture; Imaizumijo Castle Site, Miyagi Prefecture; Remains of Paddy Fields in Tomizawa, Miyagi Prefecture; Remains of Chusonji Temple, Iwate Prefecture; Isawajo Castle Site, Iwate Prefecture; Namiokajo Castle Site, Aomori Prefecture; Remains of Tawarada, Yamagata Prefecture; Akita Castle Site, Akita Prefecture; Remains of Tsukumobashi, Fukui Prefecture; Remains of Ichijodani, Fukui Prefecture; Remains of Miki-Daimon, Ishikawa Prefecture; Yuminoshojo Castle Site, Toyama Prefecture; Remains of Banba, Niigata Prefecture; Remains of Ojimanishi, Niigata Prefecture; Todajo Castle Site, Shimane Prefecture; Remains of Kusadosengencho, Hiroshima Prefecture; Remains of Onomichi, Hiroshima Prefecture; Remains of Bingo-kokufu, Hiroshima Prefecture; Remains of Akizuki, Wakayama Prefecture; Remains of Dazaifu, Fukuoka Prefecture; Remains of Dazaifu-jobo, Fukuoka Prefecture; Remains of Buzen-kokufu, Fukuoka Prefecture; Remains of Nehoji Temple, Fukuoka Prefecture;	
Wooden Tablets Excavated before 1977 (8).....	105
Nara Palace Site (14th Excavation), Nara Palace Site (25th Excavation), Nara Palace Site, Nara Palace Site (40th Excavation), Nara Palace Site (41st Excavation), Nara Palace Site (43rd Excavation), Remains of Toshodaiji Temple,	
New Studies of Wooden Documents in China.....	Li Xueqin... 123
New Studies of Wooden Documents in China (in Japanese)	
.....Translated by Fuminori Sugaya...	128
A Study of Sosatsu and Sakka.....	Hidesaburo Hara... 135
Reexamination of Wooden Tablets Excavated from Remains of Yui	
..... Towao Sakaehara...	151
Excavated Scripts and their Reference to the Common People of Medieval Japan .....	Shigeto Shidahara... 163

*Published by*

JAPANESE SOCIETY

FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八六年十一月二十日 印刷  
一九八六年十一月二十五日 発行

〒630 奈良市二条町二丁目九番一号  
奈良国立文化財研究所

編集発行

木

簡

学

会

会長 岸 俊男

TEL (094) 341-3931  
振替口座 京都 〇一五二七

京都市下京区油小路仏光寺上ル

印刷

眞

陽

社

TEL (075) 351-1603

ISSN 0912-2060



